

---

# 東方 ある家系からの幻想入り

たゆまゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方 ある家系からの幻想入り

### 【Zコード】

Z8694T

### 【作者名】

たゆまゆ

### 【あらすじ】

親に棄てられて孤児である少年

その少年はある家系のお嬢様に拾われる

そうして育てられる

その少年は今や青年へと成長した

青年になつた彼は尊敬できる師匠を持ち血の繋がつていらない義理の妹も持つた

そんな彼の物語りを覗いて見ませんか？



## 孤児である青年のお話（前書き）

駄作者が書く小説なんて嫌だ

キャラ壊れなんて認めない超展開なことが時々起るとかマジでないわ：

こんなストーリーの解釈は認めたくない

等に該当する方は戻るを押してまた小説探しをしましょう

読んでくれるのですか？

では

ゆっくりじっくりしてね！！

## 孤児である青年のお話

親に棄てられて孤児である少年

その少年はある家系のお嬢様に拾われる

そして育てられる

その少年は今や青年へと成長した

青年になつた彼は尊敬できる師匠を持ち血の繋がつていない義理の妹も持つた

そんな彼の物語りを覗いて見ませんか？

駄作者が書く小説なんて嫌だ

キャラ壊れなんて認めない超展開なことが時々起るとかマジでないわ…

こんなストーリーの解釈は認めたくない

等に該当する方は戻るを押してまた小説探しをしましょう

読んでくれるのですか？

で  
ま  
ゆっくうじてこいつれぬ！

## プロローグ

俺の名は亮太。名字は無い  
それは俺が孤児だからだ

数年前ある家計に拾われた者だ  
そこのお嬢様に拾われたって言つたらいいのかな?  
まあ取り敢えずお嬢様の両親からは酷く反対されてそれでも彼女は  
俺を置いてくれた

「亮太?」

亮「何ですかお嬢様?」

「お嬢様じゃなくて名前で呼んでくれないかしら」

亮「無理です…立場的にも」

「そう…まあ、仕方ないわね。何かあつたら言ってね?」

亮「はい」

そう言つて彼女は家中へと戻つていった

その後すぐに彼女とすれ違うように1人の少し年老いた男とまだ小さい女の子が歩いてきた

亮「お師匠? どうしたんですか? まだ剣の稽古の時間じゃないですか?」

「ああ。知つている。いやつが会いたいって煩くてな。少し相手してやつてくれるか?」

亮「ん? ああ、わかりました」

「ではよろしくな」

そして彼はこの場を後にした  
残つてゐるのは俺とこの子だけ

亮「よひ。何するんだ?」

「えつとね~…剣の使い方を教えて!…」

亮「ええ! ?ダメダメ! …まだお前には早い! …もう少し大き

くなつてからだ……」「

「ふー。義兄ちやんのケチ……」

そつ言つて頬を膨らませ「の子を血は繋がつてなくともホントの妹とじて見てきた

亮「約束するから……な？」

「むー……」

亮「よし、じゃあ他のひとをしそうか」

「やつぱり教えて……」

亮「……はあ……仕方ないな……技を教えてやる……一回しかみせないからよく頭に焼き付けてよ……」「

剣に氣を溜めるよつて、抜刀から剣圧を幾度とも飛ばす

「凄い……」

亮「わかつたか？剣の扱い方とかはお師匠に聞いたりひつだ？」

「ひさ」

あれからひさしく長い年月が過ぎた

亮「どうした？」

「買い物よりお祖父様とお義兄さんの稽古のほうがこいです……」

亮「今日はもう無いからまた明日になる。それなら買い物とこうよ  
り散歩に来たんだが……不服か？」

「そんなことないよー」

亮「もひさしおひせくなつたら剣の相手してやるからな」

「ひさー」

亮「よし。なら今日は好きなものの買つてやる。お望みの物を買つて

くれ

「ホントですか！？では…」

それから買い物は続いた。

亮「ちよ…ちよ…ホントに勘弁してくれ…俺の懐が…！」

「句でも置つてやるつて言つたのお義兄さんですよ…」

亮「そ、それでも勘弁してくれ…」

「はあ…わかつたよーならこれでおしまい！」

亮「なー…？」

その「おしまい」は俺の所持金の事を言つていたのかかもしれない  
それで家に帰つてきた

「ただ今帰りましたーー！」

とあの子は走っていく…俺はその場に倒れ込む…あるとある部屋から誰かが出てきた

「お疲れさま」

亮「あう…お嬢様?」

「今度は私の相手してね?」

亮「あ…あはは…」

今日は厄日だつたみたいだ…

妖夢が剣を磨つてもう数十年の月日がながれた  
ある日お師匠悟りを開いた  
そこであの子に後を継がせるという話を聞いた  
あの子は少し驚いた表情を見せた  
少しあつてから悟りは終了したみたいだ  
その後お師匠は俺に話しかけてきた

「お主に頼みたい事がある」

亮「え？ 何でしょ？ 」

お師匠が俺に頼み事なんて珍しかったので不思議に思った

「亮太……あの子の側にいてやつて手助けしてはくれんか？」

亮「それくらいなら御安い」用です」

「恩に切る……」

お師匠は微笑だつたが初めて笑つた顔を見せてくれた  
その後のお師匠の行方は俺もあの子も知らない

町を歩いていると急に声を掛けられた

亮「誰？」

.....

「今は知るべき時ではないわ。来年の……春の異変気を付ける」とね。  
一族が滅びるわよ」

亮「は？信じられるわけ無いだろ……」

「私は真実を伝えたまで……また会こましょ」

そう言って女性は消えた  
なんだつたんだ？それに一族が滅ぶとは？  
まあ悩んでいても仕方ない……後で考えよう

ある日

「義兄さん……お手合させ願います……」

亮「え？手合させなさいつでもしてみじやないか？」

「それはずうですけど……今回ま違います……本気で来てください……」

やつらつて真剣を抜いてくる

亮「わわ!? ちょ!? 本気でか!?」

「本気と書いてマジです！！行きまーす！！」

飛び上がり斬りかかつてきた

俺は腰から劍を取りだし受け止める

亮「危なつ！？」

「ふつ！」

すかさずあの子は腹に蹴りを入れてきた

亮「ぐつ…あー?」

あの子は少し笑つてゐるよう見えた

「義兄さん？ 本気で来てくださいって言いましたよね？」

亮「つ」

「私を…なめないで下さこ…」

亮「ぐつ…なんだよ

あの子は瞬時に後ろへ回り込み剣を振ってきた

亮「甘いぜーー！」

ガキイー！

俺は剣を受け止めた。

あの子の甲は本気だ…ならば…

亮「みじょじ…わかつたよ…なら…樂に死なせてやる

そう言ってあの子を睨み付ける

「う…」

あの子は少し後ずさつたが…体勢を立て直して睨み付けてきた

亮「いいねいいね！！行くぜえ！！」

「ひさし！」

俺の振りかざした剣を受けとめた事を確認して拳で鳩尾を突く

「か……はつ……！」

宙に浮いた敵を右回し蹴りで左に吹き飛ばす

「ぐあつ！？」

「くつ！ 行けつ！！

半靈を飛ばしてくるあの子。

無駄だ：

半靈を押し退けたその時彼女は上空に舞い上がり兜割りをしてきた

亮「我が命を絶つ者の侵略を防げ！！！『絶命剣』！！！」

## 刀を上に掲げ盾を創る

「この剣に斬れぬ物など無い」

「そこまで…！」

卷二

卷之三

亮「う農業」

太！！  
」

亮「はいいい！？」

突然の指名に声が裏返ってしまった

「貴方が一番本気になつてどいつもかるの……貴方……本気でこの子を殺すつもりだつたでしょ……？」

亮「……」

「少し頭を冷やしてきなさい……」

亮「わかりました……」

「義兄さん……」

亮「「」めん……」

俺は何時もの場所に向かつた

何時もの場所とは山にある洞穴みたいな所である  
その入口付近に座り一息つく

亮「ふう……」

確かに俺が本気になつてはいけなかつた……  
何故あそこまで本気になつてしまつたのかがわからない  
あの子と俺では明らかに俺の方が上だつた。なのに……俺は……俺は  
!!

亮「くそつ……なんなんだよ……!!」

そして俺は横になつていつの間にか眠つてしまつた

亮「む……寝ていたのか……ん?」

亮「……」

「あ……起きた」

あの子が後ろから抱きついていた

亮「まあ……何してんだ?」

「……義兄さんを探しに来ました……」

亮「まあ……あいがどうなっておぐへ

「探したのですよ?……何時間も……」

亮「そつか……泣いてるのか?」

「泣いて……ないです……」

亮「声が上擦つていろよ」

あの子の手を離し、向かい

「うつ……ぐすつ……見つかって良かったです……何かあの後ろ姿をみたら……ぐすつ……何処かへ行ってしまうんじやないかって……」

亮「俺は……お前の傍からいなくはならぬ……」の御守りをお前に

渡す。あと

あの子の頭を撫でながら俺は

亮「探してくれて……ありがとな……俺の大好きな妹……さあ帰るぞ……」

「うん！」

亮「… 質問してもいいのか?」

亮「俺からみたらまだまだ子どもだ…」

「いか見返します!! 剣の腕も!! 女としても!!」

亮「女は関係無いだろ……！？」

帰ってきてあの子と別れてから俺は屋根に登つて寝そべつていた

亮「…………明日は……」

「やうよ。春の異変よ」

亮「アンタ何処から……？」

「そんなことはどうでもこいでしょ……」

数日前にあつた金色の髪をもつた女性が横に座っていた

亮「どうでもこいつて……はあ

それから沈黙が続いた  
だが破つたのは俺だった

亮「あのせ

「? 何かしら?」

亮「その滅亡」を止めることは出来ないのか?」

「まつめつめのナビ…貴方！」と她的力ではマリさん

亮「そつか……」

「余り悲しんで無いよつね」

亮「まあ…薄々気づいていたのかもしれない…避けられないって」

「ロマンチストでもないみたいね」

亮「明日の異変を俺が食い止めるってか？無理だな。だけどな…あの2人は守りたいんだ…」

「…………まあ精々頑張つてね」

「や！」に誰か居るのかしら？」

下からお嬢様の声が聞こえてきた…

横を見るとすでに女性は居なくなっていた

亮「ああ。亮太です」

「亮太なの？」

亮「上がります？」

「うそ」

お嬢様の手を引き屋根の上に持ち上げる

「ありがとう」

亮「いいえいいえ」

「……頭は冷えたかしら？」

亮「おかげさまで」「そ、う」

亮「……」

「……」

また沈黙か！！

亮「明日は…大丈夫ですよね…」

「大丈夫よ。心配しているの？」

亮「ええ。まあ」

「でもござとなつたら亮太は……」

亮「どうしました？」

彼女の顔がだんだんと暗くなつていいく

「……何でもないよ。気にしないで…」

亮「そうですか…」

「私はそろそろ寝るわ。おやすみなさい」

亮「ああ…おやすみなさい」

そして春の異変…運命の口がやつて來た…

亮「お嬢様？」

一族が集まつていた部屋の前でガタガタ震えていた…

「亮…太…？」

亮「お嬢様！」

「いやああああああ…！」

お嬢様は走りだした…

中を覗いてみると一族の皆が亡くなつていた

亮「うう……」

俺は嘔吐感を我慢し中を確認する為剣を取りだし中に入る

亮「そんな……外傷が無い……ではどうやって……」

「義兄……さ……ん……」

亮「大丈夫か……？」

まだあの子が息をしているといつ事実に俺は安堵した

「義兄さん……から貰つ……た御守……りの力……か……な……」

亮「もう喋るな……少し此処にいろ……すぐ来るからな……」

部屋を飛び出しあ嬢様を探す

走つて……走つて探す

ある桜の近くまできた

亮「これが……満開の桜……！」

その側に立つているお嬢様

亮「お嬢様！！」

「亮太… 最後まで迷惑かけたね…」

亮「最後つて… 何を言つて…！」

「皆の死は… 私のせいなの…」

亮「な！？ 嘘だ！！ なら何で外傷が無かつたんだ！！」

「それは私の能力だよ…だからもう誰かを殺してしまわぬよう」

首に小刀を当てるお嬢様

亮「止めろおおおおおおお！」

走りだす俺… 賴む… 間に合つてくれ…！」

ズシャ

亮「あ……あ……ああああああああ……」

血飛沫をまともにかかった俺は、倒れ行く彼女を受け止めた

「最……後……のれ……こ……まで……まよ……まよ……まよ……な……まえ……い……  
て……」

彼女はそのまま動かなくなつた  
俺を責めるかのように雨が降つてこる

亮「まさか……アイツの言つた通りになるなんて……」

「だから言つたでしょ」つづ

あの時にあった女性が田の前に現れた

「彼女の魂は私が預かるわ……望みなら一緒について来てもいいわ

亮「意味わかんねえぞ！　大体どこに連れていくんだー？」  
「そこで暮らさせるのかー？」

「彼女の行くところは言えないわ……その通り……彼女を亡靈として  
そこで暮らさせる。この屋敷と共に」

亮「つ……なら……あの子も連れていくてくれないか？　彼女だけなら  
心細いだろうから」

「わかったわ。ならその子を連れてきてもいいやん？」

亮「わかった」

あの子の元へと駆けていった俺に

「いい友を持ったのね……羨ましいわ……」

後ろで言っていた言葉に気づいてはいなかつた

亮「おい……しっかりしろ……」

「義兄…さん…？ もう…ね…たし…は…駄目…です…」

亮「そんなこと言ひな………」

あの子を抱き上げ全速力で走る

「義兄さん……… ありがと…」

.....

亮「なあ……この子は助かるのか！？ 助けられるのか！？」

「大丈夫…任せて……それで、貴方はどうするの？」

亮「正直ついて行きたいが………やる」こともあるしな…だから俺はいい…お嬢様の分まで生きないと…未来を知つていてどうにも出来なかつた俺への罪だから………あとその子にこの剣を渡してくれ」

「わかつたわ。ではサヨナラ。亮太…お元氣で」

亮「2人を頼んだ」

女性はまたその場から姿を消した

もつお嬢様が苦しまないよう満開の桜の下に亡骸を埋めた

さあこれからどうしようかね…

つて決まってるな…

アイツの分まで生きなれば

亮「取り合えず町を出たけど…多分俺は死んだ」とになるはずだ

森の中を歩いて何時もの場所に向かつた

亮「身を隠せるかもな…」

亮「なんだ…何時もの洞窟だよな…」

それから死なない程度に食料をとりなんとか行き長らえていた

亮「もつ昔の面影は無くなつたな…そして俺は忘れ去られ幻想になつた…か…あいつらどうなるのかな?大丈夫かな?」

何故か涙が出てきた…あの楽しかつた日々には戻れない…それだけでも辛い

だから涙が出るのだろう…確かに生きるのが俺の償い…こんなにも辛いものだつたなんて

もう寝よう…

泣き疲れた

その頃町ではある少女が人を探していた

「すみません!!私と同じような格好をしている方を探しているのですが!!」

だが彼女の姿はあまりにも他の人達と違つかった

「写真とか持つていなーいの?」

「しゃ…しゃしん…ですか?」

彼女の時代に写真なんてモノはない

「…わかりません」

「話しきならないな

といつて男性は去った

周りからは見たこともない服装の彼女は異端者として見られていた

「もうお祖父様もいないのかな……行方不明っていうのは本当だつ  
たんだ……義兄さん……やっぱり離れてしまいましてね……  
うつ……逢いたい……逢いたいよお……うわあああああああん……」

雨の中独りぼっちの少女が泣いていた

## 第一章

田を覚ますと知らない場所に横たわっていた

亮「？？？…なんだなんだ？…どうだこい？」

辺りは木が生い茂つていた

田の前には階段があった。他に行くといつも無いので階段を上がる

亮「いんじわ～」

階段を上がり終えた俺はだれか居ないのか呼び掛けでみた

靈「ん？誰？…参拝客？なわけ無いわよね」

亮「無視しないでくれますか？」

靈「い」めんなさい。何かしら？」

亮「色々聞きたいけど……」Jは何処ですか？」

靈「私の神社…忘れられてるのかしら…まあいいわ此処は博麗神社よ」

博麗神社？

聞いたことないぞ……

はたして此処は何処なんだ……

亮「博麗神社……」

靈「そりや。まさか…知らないの？」

亮「すみません。聞き覚えが無いもので

靈「はあ…いつか忘れ去られるのかしら…」Jの神社…」

亮「あ…えっと……所でこの辺りは何という地域なのですか？」

靈「地域？いやいや。ここは幻想郷よ。もしかして幻想郷のこととも知らないの？」

亮「幻想郷？」

聞いたことない…住んでいた所と同じようで何処かが違う  
幻想郷に博麗神社…

靈「可哀想に…迷い込んで来てしまったのね。帰してあげたいけど  
も…ちょっと色々あつたからもう少し後でもいいかしら？」

亮「仕方ないですね……此方から頼んでる身でもあるので」

靈「あ…その代わりここで居候してもいいわよ」

亮「ホントですか！？」

縁側に招かれてお茶を出してもらい幻想郷のこと最近の異変について  
話してもらつた

亮「取り合えず此処の事は大体分かりました。でも紅魔館という所  
が気になります」

靈「紅魔館？ただの人間が生きて帰れる所じゃ無いわよ？」

亮「でも…幻想郷に住む限り友好的にならなければ…」

靈「ふーん…まあ私の招待なら大丈夫でしょう」

亮「ありがとうございます」

靈「武器は護身用に持つて行つたら？神社の倉庫に剣があつた筈…  
ちょっと待つてて」

亮「あ…俺も行きますよ」

靈「いいわよ。待つてて」

と黙つて倉庫の方に歩いていった

その後境内の方から誰かがやつて來た

？「靈夢のところにお客さん？参拝客？珍しいわね

女の子が横にいる女性に話しかけていた

? 「確かにそうですね」

女性は口傘を女の子にしていて言葉を返していた

亮「いやんこひがせ」

? 「貴方何物?返答しだいでは」

女の子が尋ねてくる

とこうか脅しに近いな

何か何処から出したかわからない槍を出してくる

居候なんて言つたら殺られそうだな

亮「いやいや別に俺は怪しい者じゃない!ただの参拝客だ!..

!」

? 「果たしてどうなのかしらね」

セイヒン靈夢ちゃんとがやつて來た

靈「あらりっ・レミコアに咲夜じゃな」

レ「また来たわ靈夢。それよりコイツは誰なの?」

レミコアという女の子が俺を指差してきた

亮「だからただの「居候よ」なあー?」

亮「いやがつたよこの人!!

ああ…顔が怖ええ

レ「ああやうなの」

亮「ちよ…ちよちよ…は、早く武器を貸してください…」

レミコアの方を見ながら靈夢の方に手を伸ばす

靈「ちよつと…ビーム触つて…」

今の行動で油に火を注いだようだ

レ「貴様ああああーー！」

亮「うわあああーー！」

目の前に先程の剣を突きだし槍を防ぐ

亮「くつーー調子に乗るなーーってあれ！？剣が抜けないーー？」

靈「あ、言い忘れてたけど…ずっと前から抜けないのよ」

亮「それを早く言つてーーー！」

レ「ほらほら行くわよーーー！」

亮「仕方ない…帶刀術だーーー！」

レミコアに向かつて走るがレミコアの方が一足早かつた

後ろに回り込まれたがすかさず振り向き防御する

レ「うわーーー！」

亮「素手?いや…爪か!?」

レ「もう一つ!」

横に腕を振つてくる

皮膚を切り裂かれ左腕から血が出てくる

亮「何なんだよ……人間じゃねえのか?此処はどうなつてんだよ」

靈「よそ見しちゃ駄目!…」

亮「くつそおおおおおおー!…」

一か八かで剣を抜こうとした

すると

鞘から刃が抜けた

亮「よつしゃあああー!…」

やつた!…抜刀できた!

だが刃がぼろぼろみたいだな

レ「抜けたところで何ができるのかしら……？」

亮「できるやーーー！」

地面に剣を突き刺し土をほりあげる  
かなりぼろぼろのかミシミシ音をたてる

レ「そんなもの……」

レミリアが突っ込んでくるが飛ばした土を土を操る程度の能力で集  
め壁にすると案の定激突してきた

レ「ぐつ……」

後ろに回り込みレミリアの腕を持つて関節を極めて地面に押し潰す

レ「あつ……痛つ！？」

亮「終わったな

レ「何故殺さない！？命を狙つてきた相手の……」

亮「命なんて取らない…取つても何になる…もつ誰も死んでほしくない…例えそれが赤の他人でも」

レ「……泣いてるのかしら？」

亮「いや…別に…そもそも離すぞ…お前の連れがお怒りだ」

そつと手を離して体を持ち上げ立たせる  
その様子を見た連れの人は構えていたナイフをしまつたがまだ警戒  
をといていないみたいだ

レ「貴方…何者なの？」

亮「それはお互い様だ」

レ「わ、私の事を知らないの？」

亮「ああ。今さつき此処の世界に来たばかりだからな。詳しい事は

知らない

レ「ならお互いに自己紹介から…私はレミリア・スカーレット。知つての通り紅魔館の主よ」

亮「ふーん…お前が紅魔館の主か…まだ幼いな」

レ「なつ…？幼いですって…？」

亮「ああ。幼い」

レ「何よ…！…アンタだつて…！…アンタだつて…」

怒つてるレミリアを無視して話を進める

亮「あーはいはい。じゃあ俺の自己紹介だ。俺は亮太だ。半人半靈  
という種族だ」

レ「何よ…！…無視するな…！」

亮「ああ自己紹介は終わつたぜメイドさん？」

? 「はあ…仕方ないわね。お嬢様もお喜びのようすでし」

遠くで「咲夜!…そんなわけないでしょ…」といつ声が聞こえる  
が無視である

咲「私は十六夜咲夜よ。紅魔館のメイド長を務めているわ」

亮「そうなのか。ちょっと教えてほしいんだが…さっきのナイフを  
数本くれないか?」

咲「…気づいていたの?あのナイフ…まあいいけど…はい」

先程のレミコアとの戦闘中に周りに仕掛けていた投げナイフのことだ

亮「ありがと」

レ「だから無視するな…咲夜もよ…」

咲「すみませんお嬢様」

レ「まつたく…亮太…少し話してもしましょ」

亮「あ、ああ…せつめいとは大違いだな…」

咲「ふふ…それがお嬢様よ」

靈「ああ…ちゅうじゅう!!リリア…勝手にお茶を飲むな…」

レ「別にいいじゃない…」

靈「良くないわよ…ほら…アンタの…湯飲みよ…」

「チンチッ」とこつ音がした時レミリアが此方に走ってきた…泣きながら

十六夜にしがみつき涙田+上田使てのコンボをくりだした

咲「う…お嬢様…」

十六夜は鼻血を吹き出し倒れていこうとしたが俺が阻止した

亮「おい……十六夜……大丈夫か……」

レ「咲夜……咲夜ああああ……」

その後靈夢ちゃんと部屋を借りて十六夜を寝かせた

亮「うわ……内出血してるな……」

レ「う……痛つ……」

怪我をしたレミコアを治療していた

亮「まつたく……派手にせつしかったな……ねえ靈夢ちゃん?」

靈「な、何のことかしら? それより応急手当もお手のものね」

亮「(話を反らしたな)まあ妹もいつやって何処かにぶつけたり転けたりしてたから応急手当べつにまでもあるわ」

レ「また幼いつて……」

亮「言つてないだろ」「

レ「頭を撫でるなーー!」

取り敢えずレミリアと話をしたかったのだがやはり十六夜が心配になつたので此方に来た

亮「起きてたのか」

咲「ええ」

亮「そうか」

咲「ええ」

亮&amp;咲「…………（止まつた）」

亮「紅魔館はまだ他に人は居るのか?」

咲「人つていうのはおかしいわね」

亮「まさか、人間はいないのか」

咲「その通りよ。魔法使いに悪魔がいるわね。あと…」

亮「あと？」

咲「お嬢様の妹がいるわ」

亮「アイツの妹か…なかなか面白いかもな」

咲「だけど会わない方がいいわね」

亮「何故だ？」

咲「少し乱暴者なのよ。レミリアお嬢様よりね」

亮「ほう…なら気を付けるよ。あと遊びに行つても大丈夫かな？」

咲「私は大丈夫よ。何時でも貴方を迎えるわ。あとはレミリアお嬢様の許可ね…」

その時襖を開けてレミリアが入ってきた  
霊夢さんと誰かを連れて

レ「私も歓迎するわーー！」

亮「そうか。ありがとう。といつか横にいる人は誰だ？」

？「アンタが亮太か」

亮「ああ確かに亮太だが……霧雨魔理沙か？」

魔「『』名答だぜ……私が紅魔異変の解決者の霧雨魔理沙だ……いだつ  
！？何すんだよ霊夢！？」

亮「霊夢さんも異変の解決したんじゃ……」

靈「そうよ。まったく魔理沙ときたら……そもそも一人で解決したかのよ  
うに言うんだだから」

魔「えへへ……まあいいじゃねえか」

亮「まあ取り敢えず今から俺はレミリアの屋敷に行こうと思つのだ  
が…主不在だと心細いから2人とも一緒に行かないか?」

レミリアと十六夜に提案してみる

レ「大丈夫よ」

咲「お嬢様が大丈夫なら私もいいわよ」

亮「ありがたい。ではさっそく行くか」

レ「そうね。また来るわね靈夢」

靈「まあ手土産があるなら歓迎するわ」

魔「私も一緒に行くぜ。借りたい物があるからな」

亮「借りたい物?」

魔「そりだぜ。一生借りるだけなんだぜ」

亮「それは借りるとは言わないだろ……」

咲「ひやんと返してあげなきこみ? パチュリー様も悲しんでこるから

魔理沙は「何時かは返すつもりだぜ」と言つて先に行ってしまった  
小言を聞きたくなかったのだろう

亮「空を飛ぶのか……いや……常識には囚われない……か

レ「何をぶつぶつ言つてこりの?」

亮「いやなんでもない……じゃあ行こうか。靈夢さん夜には帰つてき  
ますね」

靈「分かつたわ。行つてらっしゃい  
紅魔館に着いた俺。

レミコアと咲夜は皆に知らせるからと先にいってしまったので後か  
ら来ることになってしまった

亮「ほう…紅魔館つてだけはあるな。第一印象は……紅い…！」

それはそれは真っ赤な館であること  
門がある。だが門番がいるみたいだ  
チヤイナ服つてやつかな？異文化はよくわからないな

？「貴方は誰ですか？」

亮「まだ聞いてなかつたみたいだな。俺は亮太です。アンタのところ  
のお嬢様が招待してくれたんだが…聞いてないか？」

？「そうなんですか？」

亮「ああ。だから通つてもいいか？」

？「でも…それはちょっと…」

亮「仕方ないな…」ここで待たせてもらひつよ。えーと…俺は亮太だ。  
アンタは？」

美「私ですか？私は紅美鈴です」

亮「美鈴か。弾幕よりも格闘の方が優れてるんだよね。聞いた話では」

美「何か格闘だけしかできないみたいな言い方ですよ」

亮「えつー…いやいや…そんなつもりじゃなかつたんだが…済まない」

美「ふふつ…わかつてますよ。案外いい人そうですね」

亮「あ…ありがとう…」

照れ隠しとしてさつき拾つたレミリアの帽子をくるくると回す

美「その帽子はレミリアお嬢様の物ですよね？」

亮「うん。一緒に来てたんだが皆に知らせるからと先に行つた時落としていつたんだ」

美「なら大丈夫ですね。通つてください」

亮「大丈夫なのか？」

美「お嬢様の意図が読めましたので」

亮「？ そうか」

亮「いや～…しかし、本だらけだなこには」

俺は書物がたくさんある部屋に入っていた  
レミリア？ 後で大丈夫でしょ……多分

亮「第1村人（？）はつけーん！！」

？「うるさい… つて貴方誰？」

亮「俺は亮太だ。どんな書物読んでるんだ？」

？「魔導書よ」

亮「そうか。名前聞いていいか？」

パチ「パチュリー・ノーレッジ」

亮「パチュリーか。レニアの招待で来たんだ。宜しく」

パチ「宜しく。それにしてもハイが？珍しいわね」

亮「レニア？」

パチ「レニアの」とよ

亮「ほひレニアってのがアイツの愛称か……ん~……」

魔法使いつてのはみんなじ服装だと呟つてたんだナビ

パチ「な、何？さつきからじつと見てきて……」

亮「いや……魔法使いつてのは皆みんなじ服装してるのかなって思つてたんだけど違うみたいだな」

パチ「…………は？……まあ違つわね。それが何か？」

亮「いいや。ただ単に氣になつただけだ。レミリアを待たせるのも悪いから行くな」

パチ「そう。何時でも来なき。相談くらこなうのりわよ。それに借りてくせー」……え……

俺たちの間を魔理沙が全速力で横切つた

パチ「待ちなさいー！」

パチヨリーが走つていつた。

俺は後ろにいるもう一人の人物に話しかけた

亮「後ろこころやつ…出できな。何もしゃしなこつて

こ「盗み聞きするつもりではなかつたのですが…スミマセン」

亮「いや、いいさ」

「貴方のことは先ほどのお話でわかりました。私は小悪魔と申します」

亮「小悪魔か…呼びこへいかな…」

亮「それなら何でもござりますよ」

亮「そうだな…………」あ……なんてビックリかな?」

「わかつました。では宜しくお願いいたします。亮太さん

亮「ああ。宜しく」

廊下を歩いてこむとレミコアを見つけたので声をかけた

亮「レミコア~」

だが彼女は振り返らずそのまま歩いていく  
思わず左肩を掴んで呼び止める  
すると振り返りこちらを見てきた

亮「レミコア……じゃない……」

？「貴方は誰？お姉様を知っているの？」

亮「お姉様？もしかしてレミリアの妹か？」

？「そうだけど……貴方は誰？」

亮「俺は亮太つてんだが……」

フ「亮太ね。覚えておくよ！私はフランドール・スカーレット。宜しくね！……

亮「あ、ああ。宜しく」

あれだなうん……姉より元気だな  
道に迷つてたところだフランドールに聞くのもいいな……

亮「なあフランドール。レミコアの居る場所わかるかな？」

フ「わかるよ。ついてきて」

フランドールについていくと一つの大きな扉の前に来ていた

フ「！」がお姉様の部屋よ。お姉様～？入るよ～

ガチャ…ギギイという音をたてて扉が開いていく  
そこには着替え中だったのか霰もない姿がそこにあった

レ「ちょーー開けんなーー閉めて閉めてーーー」

亮「よーー来たぞレミリア」

レ「アンタも普通に入っこないでーーー」

亮「別にお前の未発達なの見たって俺は…あいたつー？」

レ「いいから向こうつを見ていろーーーそして未発達で悪かつたなーーー」

顔を叩かれて後ろを向かされた

フ「ふふつ…何か亮太って面白いね」

唐突にフランデールが言つてくる

亮「そうか？」

フ「うう。 それなら弾幕」(ひ)遊ばなくとも廻屈しな」かも

亮「? 何か言つたか?」

フ「うう。 それにしてもお姉様への態度が普通じゃないね」

亮「普通じゃないか? どんな相手でも対等にいたいからね」

お嬢様以外はな……まつたぐ……元氣でやつてるのかな……

フ「どうしたの?」

亮「ちよつと世の「と世に出でかけたり……」

フ「ふーん……よかつたら「聞いてあげてもここわよー」むー……割り込まないでお姉様」

レ「やあ、話してみなさい」

亮「ホントに聞くのか?面白くないぞ?暗くなるだけだぜ?」

レ&amp;フ「それでも……。」

咲「私も聞きたいわ」

いつの間にか咲夜が来ていた

亮「お前もか!?まあ、いいか……じゃあ話すぞ?」

亮「……っていう事があつたんだよ……ほーらしんみりしちゃつたじゃないか」

レ「大変だったのね色々と……家族がいないのよね?」

亮「まあ、血の繋がつてない家族ならいたがな数人だけ」

フ「なら私もその家族に入ろうかな。大丈夫かな?」

亮「別にいいよ」

断る理由はないし家族が増えるのはうれしいからな

フ「ありがとウー。」

レ「だけどフランだけじゃないわよ。私達も家族よ…」

亮「お前たち… それは同情か？」

レ「いいえ。自分の意志。同情なんかではないわ。ね？咲夜」

咲「ええ」

パ「そうこういふことは

」「もうこういふことはないよ

美「です」

そこにはさつときまでは居なかつた筈の二人が来ていた

亮「お前たちまでいたのか！？はあ…」

レ「つてことで私達も貴方の家族の一員ね。家族なんだから遠慮したら駄目よ？」

亮「あ、ああ… ありがとつ…」

久しふりだな… 家族の暖かみ… やっぱりあの頃を思い出すじやねえか  
だけど… 新しい家族も悪く… 無いかもな…

俺がここにきてからだいぶたつたある第百十九季の五月のことだった何時もなら春を迎えて雪解けの時期なのにまだ雪が降る始末であった

亮「靈夢さん…幻想郷の春はこんなにも遅いのですか？」

靈「おかしいわね…何時もこんなんじゃないのに…ちょっと行ってくるわ。お留守番宜しくね」

亮「え？あの、ちょっと」

と狼狽えている間に靈夢さんは飛んで行ってしまった  
お留守番より着いていつてみよつかな  
そうして俺は靈夢さんの後をつけていった

亮「あつちは湖の方だな…彼処にはチルノとレティ…それに大ちゃんがいたと思うんだが…」

すると下のほうから

大「亮太さん…」つちでーす！」

亮「おー大ちゃん。どうした？」

大「チルノちゃんとレティさんが…！」

亮「もしかして…あちゃ…なにやつてんの…」

レテ「別にいいでしょ？今年の冬は長いから少しくらい遊んだって」

チ「そうだよ…まだレティがいてくれてるから少しくらい」

亮「あーあーわかったわかった。つたく…それで靈夢さんはどうちに行つた？」

チルノの言葉を遮り俺は靈夢さんの行方を聞いた

レテ「向ひの方よ」

亮「わかった。ありがとな」

また靈夢さんを追つて俺は飛んだ

亮「なんだなんだ?変な所に迷い込んだじゃつた

人が居る気配がないのに立派な家がある。まさしく変な所である

亮「昔文庫で読んだことがある迷い家みたいだな」

靈夢さんは何しコレ?「へ?

ん?あれば…女の子が落ちていつている

落ちていつてる!?

亮「わわ、わーー!」

地上すれすれで相手をキヤッチすることができた  
怪我をしていたので応急措置を行つた

?「いてて…強かつたあの巫女…あれ?お兄さん誰?」

亮「俺か？俺は亮太」

橙「そり。亮太っていうんだ。私は橙だよ。治療してくれてありがとう。でも早く行かないと此処と向こうの扉が閉じちゃうよ」

亮「扉？」

橙「うん。取り合えず今は巫女についていて」

亮「う、うん。わかつた。また会えるよな？」

橙「さあね」

亮「そつか…まあいいや。【またな】橙」

そういうてこの不思議な場所を抜け出した  
魔法の森に来ました…靈夢さんを探していると袖を引っ張つてくる  
者がいた

亮「ん？誰だ」

上「シャンハイ！」

亮「わあ…上海かどうしたんだ？」

上「シャンハイ！シャンハイ！」

とても慌ただしく何かを訴えかけてるようだった

亮「何があったのか？」

上「…！」

上海はついてことと言っているかのよつに見えた  
そして上海についてこつた  
すると少し怪我をしているアリスに出会つた

亮「おいアリス。大丈夫か？」

ア「亮太?どうしたの?」

亮「あの巫女さんを追いかけてるんだ」

ア「あの? なら冥界の方にいくと思つわよ」

亮「冥界? わかつた。行つてみるよ」

ア「行つてらっしゃい。あ、あと……その……手当であつがとう」

亮「おひ」

上「シャンハイ」

亮「上海もまたな」

魔法の森を抜け冥界を田指した

冥界と此方の結界みたいな所で靈夢さんと合流した

亮「靈夢さん……」

靈「亮太! ? ビリーハーハー! ーー?」

亮「いや、楽しめりでしたから…」

靈「まあ…まあいいわ…さつき騒靈の二姉妹を倒した後だし…後は二二を越えて異変の根源へ一直線よ」

亮「そうですね」

靈「それにしても亮太ってなかなかやるのね」

亮「まあ…多少は腕がありますからね」

靈「でも二の妖精に対しても近距離だけで戦つてゐるじゃない」

弾幕とこうものを俺は出せなかつた

だから近距離だけでしか倒せなかつたといつわけだ

亮「近距離しか無いのですから仕方ないです」

靈「それにしても…凄く厚着してゐるわね…その服一枚貸してよ。顔も見えてないくらこしてゐるの」

亮「えー……靈夢さんも着てくれればよかったですじゃないですか」

靈「そんなこと言つても貸してくれるのね。ありがとうございます」

亮「はあ……あ……階段が見えましたよ」

靈「そうね。じゃあ亮太……行くわよ……」

亮「はい……」

さあ……根源に会つに行こうじゃねえか……

亮「だいぶ飛んで来ましたけど……」

靈「つかないわね……」

その時田の前に誰かが現れた

亮「なー?」

靈「亮太ー!何してるのでー!」

いや、違う…あの子な訳がない…  
靈夢さんの声は聞こえず相手を見ていろと…

？「貴方もなけなしの春を持つていろのですね？それを渡してください  
さい…！」

亮「渡すわけにはいかない…力強く取りに来るのなり…戦つてや  
る」

靈「ちよつ…ちよつと亮太」

妖「私の名前は魂魄妖夢です。貴方の名前は？」

やつぱり、妖夢だったのか…

亮「すまない…まだ名を明かすことまだない…じやあやつが」

妖「妖怪が鍛えたこの白楼剣に斬れぬ物などあんまりない…」

亮「あんまりないってなんだよーー。」

俺は帯刀した剣で構えをとる

靈「なにがなんだか分かんないけど先に行くわねーー。」

靈夢さんが妖夢の横を通り抜けようとした時妖夢が靈夢に斬りかか  
つた

亮「おっと。お前の相手は俺だろ?」

妖「くつ…行かせるわけには…」

亮「ああ、行くぜ?」

俺の目的は氣絶させる」と。殺すつもりなど全くない

妖「ふつーーたあつーー。」

亮「遅い……まだまだだな……」

妖「くつ……ならば……」

妖夢は俺から距離をとり断命剣を取り出した

亮「……」

妖「倒れろ！！我の仇なす敵の命を断て！！断命剣！！」

亮「…バカ野郎が！！」

妖夢の剣は俺の体を通り抜けた

妖「あ…あれ？通り抜けた？」

亮「スキあり……」

妖「きやつー…」

亮「つてすると思つか?」

俺は妖夢にドロップインをくらわす

妖「いつつー?…なぜ?なぜ私を殺さない!…?」

そろそろ種明かしといきますか

俺は厚着を止めて妖夢に向き直った

亮「久し振りだね…妖夢…」

妖「え…ウソ…何で…?だって…だって義兄さんは…義兄さんは  
!…」

亮「死んだとも思つのかい?」

妖「そ、それもありますけど…何故幻想郷に!…?」

亮「いやー…俺も分かんない」

妖「分かんないって…はあ…」

飽きれ顔でため息をついている妖夢

亮「な、何だよ」

妖「何時もの義兄さんで安心しました」

亮「ちよつー、急に抱きつくなよーーー。」

妖「えへへ……また会えて本当に良かったです……本当に……」

亮「妖夢……」

妖「居なくなつたら承知しませんからねーーー。」

亮「わ、わかつた」

妖「それとこれ返します」

妖夢が渡してきたのは断命剣だった

亮「やはりお前では扱えないか」

妖「何故義兄さんの剣は斬れなかつたのですか?」

亮「それはな…これは使用者の心が分かるんだよ」

妖「心が?」

亮「妖夢が相手を斬るうと思つても妖夢の心には俺が残つていただきから斬れない。誰でも好きなもの嫌いなものが心の中に分類されている。俺は好きなものに含まれていたんだな。だから斬れなかつたんだ。忘れられてるんじゃないかつてひやひやしてたよ」

妖「忘れられてるわけないじゃないですか!!バカ義兄さん!!」

亮「な!?何だと!!もう一度言つてみる!!」

妖「何度も言つよ!!バカバカバカバカバカバカ!!大バカ義兄さん!!」

亮「このつ…!!」

妖「ぐすつ…えつぐ…ホントに…ぐすつ…何処に…ぐすつ…行つて  
た…えぐつ…の…心ぱ…ぐすつ…心配してたのに…えぐつ…もう  
…一度と…ぐすつ…会えないと…思つてた…」

亮「妖夢…ゴメンな…」

妖「うわああああああ…！」

妖「この先です…！」

お嬢様に会つために行つているが感動の再会とはいからしい

亮「くそつ…！まさか生前の記憶が無いなんてな…！…しかも何が埋  
まつているか知りたいから西行妖を満開にする気だつて…！」

妖「説明じ苦労様です」

亮「とにかくお嬢様のとこに…いた…！お嬢様…！」

幽「？」

咲&amp;魔「亮太！？」

靈「亮太…近寄っちゃダメよ…」

亮「俺だよ…お嬢様…わからないのか…！」

幽「…誰？私の知り合いは妖夢だけよ？」

亮「なんだよ…ウソだろ…」

妖「義兄さん…」

その時西行妖が妖しく光始めた  
暴走を始めたようだった

亮「八分咲だと…？皆逃げる…」

全「…」

亮「後は俺に任せてくれ…！」

魔「でも一人じゃ無理だぜーーー！」

靈「そつよーーー！」

咲「死ぬ気なの！？」

亮「五月蠅いーーー早く行けーーーこれが俺の罪滅ぼしなんだよーーー！」

腰から断命剣を抜き相手に向かって振りかぶる  
前々から忌まわしくて嫌いだつたんだよ

亮「その桜ああああああーーー！」

西行妖からの攻撃に耐えつつ近づいていく

亮「どけーーー邪魔だーーー今だーーー幽々子ーーー今助けるからーーーつおおお  
おおーーー！」

切つ先が西行妖に触れたとき辺り一面に光が放出された  
西行妖から放たれた幽々子を抱き止め地上に降りてそこで意識を失  
つた

田が覚めると知らない所で寝かされていた

亮「どこだ此処…それに夢オチつてわけ…でもないか…刀残つてゐ  
し」

その時襖が開いて誰かが入つてきた

幽「おはよう」

亮「ああ、お嬢様ですか」

幽「やはり私は貴方の知り合いなのね…『めんなさい…』

やつぱり忘れているのか…くつ…

亮「仕方ないです…よつわああ…」

何故かお嬢様は抱きついてきた

亮「な、ななな…なにやつてるんですか…」

幽「ふふ。照れてる亮太可愛い」

亮「ちよつー？幽々子だけ……というかお前絶対記憶あるだろ……」

幽々子を引き剥がし田の前に座らした

幽「やつと名前で呼んでくれたわね……」

亮「え……あ……はい」

幽「久し振りね亮太。あと家系とか気にしなくていいから敬語とか  
しなくていいわよ」

亮「あ……うん。幽々子久し振り。妖夢こっちにきたら？」

そつ言うと襖が開いて妖夢が入ってきた

妖「兄さんーー！」

と言いながら抱きついてきた  
お前もか…

亮「妖夢… 何で助けてくれなかつたんだ?」

妖「楽しそうでしたから」

満面の笑みで言つてきたため溜め息しか出でなかつた

亮「いいやせつかして… 田中楼… ですよね?」

妖「そうですよ。兄さんの部屋も残してこます」

亮「そつか… そつこやアイシはビリヒテるのかな? 金髪の長い髪を  
もつてる女性なんだが…」

幽「もしかして…」

? 「私の主のことかな?」

そこには九つの尾をもつた女性が現れた

亮「貴女は？それに主つて…」

藍「私の名前はハ雲藍です。よろしくお願ひします。主といつのはハ雲紫様のことです…紫様がお話があるみたいなので私を使わせたみたいですね」

亮「わかった。じゃあ連れていってく…れえええうわああああああああ…」

喋っている途中で足下が無くなり落ちていく

幽「落ちたわね」

妖「落ちましたね」

藍「はあ…まつたく…」

亮「いだつー？何なんだよーーー！」

紫「ふふ…」めんなさいね。あと少し振り。無力な半人半靈の子

亮「八雲……紫……」

紫「まさか……」んなとこ今まで来るなんてね

亮「まあ、成り行きとかでね?」

紫「私に聞かれても」

亮「それより……俺は此方にいていいのか?」

紫は少し考えた後許可を出してくれた

紫「いいわよ。向こうにいるよつちうの方が樂しいでしょ?」

亮「ああ。とこつよつこには何処なんだ?」

一回来たこともあるよつなそんな雰囲気を出してこる

紫「そうね……」の手をみたら分かるんだじゃない?」

亮「え？」

橙「いんじはお兄さん」

亮「橙か。どこで」とまだつづいただ？

紫「いじはマヨヒガよ」

亮「え？ええ！？あの迷い家！？何か頂戴！？」

紫「ダメよ」

亮「そんな」と言わずに……

紫「仕方ないわね……これあげるわ

投げてきたのは一本の刀

亮「やつた……ありがとな紫……」

橙「お兄さん子供みたいですね」

藍「そうだな。紫様も顔も緩んでいる」

紫（弟ができたみたい…）

「うして俺の中では」の異変は解決した  
楽しい日々が進んでいくんだろうな  
やつ思つとなんだか嬉しくなつてきた

春雪異変が終わって今は初夏  
博麗神社では三田おきに宴会が行われていた  
俺は気づいた

亮「鬼がいるのか？」

何となくだがそんな感じがした  
宴会場を離れると霧の密度が濃くなつた

亮「鬼さーん…… ってやつぱり勘違いか？」

？「誰だい？私を呼ぶのは？」

濃い霧が萃まつて人の形をしていった

亮「やつと本物に会えたな。はじめまして。亮太といいます」

萃「私は伊吹萃香だよ。で？用は何？」

亮「手合わせお願ひします！！」

萃「余程腕に自信があるみたいだね」

俺は首を横に振りそれを否定する

亮「俺はただ鬼さんの力を見たいだけだよ。異変は人任せだ」

萃「くすっ…面白い人間だね…じゃあ行くよーーー！」

亮「よつしーー！」

戦いは数十分で終わった

二人の最後の攻撃が交わされた

亮「はあ…はあ…おあいこか？」

俺はその場に倒れ息を整えようとしていた

倒れている俺の横に余裕寂々な鬼さんが座ってきた

亮「鬼さん余裕寂々だな…」

萃「久し振りに少し本氣を出せたよ」

亮「アレで本氣じゃないのかい…？ わが…鬼さん」

萃「鬼さんじやないよ… 間前で呼んでいいよ」

亮「萃香でいいか？」

萃「それでいいよ」

亮「さあ、俺は戻るよ。妹が煩いからな。萃香が起こした異変だ。誰かが解決しにくるよ…全てが終わったら歓迎会とこいつの宴会をしようぜ」

萃「うん。じゃあ終わったらお酒泔を合ひともう一つ…」

亮「わかつたわかつた。じゃあまた後でな」

萃「また後で」

特に俺は何もしていないが鬼と戦えたのが貴重な体験だったかな  
この異変が終わって萃香と話していたが

萃「亮太は妹さんがいたんだよね？」

亮「ああ。魂魄妖夢っていうんだが」

萃「会ったよ」

亮「どうだった？」

萃「亮太程じゃなかつたかな」

亮「そつか…」

萃「ああ、付き合ってくれるつて言つたんだから今日は楽しむよー。！」

亮「はいはー…」

妖夢が強くなつたら…いやこんな事言つたら怒られるな

百鬼夜行が終わつて今季の秋のことです

亮「え！？一人ともこんな時間から出掛けれるのか！？」

時間は深夜を越えるか越えないかの時間だつた

幽「ええ。今宵は満月の筈だつたんだけど満月が出てないのよ」

妖「異変解決の為に行つてきます」

亮「……さいですか

おいてけぼりか

確かに満月が無いものな…まあいいや。目が覚めたからどうか行こうかな

あれから数時間経つたのだが

亮「夜明けが来ないんだが…満月とは別に誰かが異変を生んでるのか？」

少し探して見るか

何か嫌な予感もするけど…

亮「異変解決 異変解決～」

俺は好奇心に負けてもう一つの異変を探しに行つた

靈夢&紫チーム

亮「いたいた…そこ」の異変の発端者め…覚悟しろ…よ…？

靈&紫「亮太？」

亮「う…靈夢わんと紫…おわか違ひよねー？」

紫「私達を倒しに来たのかしら？」

亮「あいや…やつだといたいけど言えない雰囲気…」

靈「亮太？邪魔しないでくれるかしら？」

亮「ひい！？いやいや滅相もない！！」

紫「絶対に倒してやる！－－ですって」

靈「仕方ないわね」

亮「お一人さん？まさか…」

靈&amp;紫「覚悟を！－！」

亮「嘘だろ…」「うなりや腕試しだ！－行きますよ－－－一人とも…」

靈「大丈夫？」

亮「な、何とか…」

紫「案外手こずらせててくれたわね」

亮「早く行つてください。俺も後で行きますから」

何での二人なんだよ…

魔理沙&アリス

亮「お。魔理沙とアリスじゃないか」

魔「ん？おお。亮太か。何してんだぜ？」

亮「俺は俺の異変解決だよ」

ア「異変？」

亮「ああ…夜明けが来ないから誰かが時間を止めてるんじゃないかな  
つて」

魔「なあアリス」

ア「何よ?」

魔「それって私達の事だよな」

ア「そうね」

亮「何してるんだ?」

魔「なあ亮太」

亮「何だよ?」

魔「異変解決は楽しいか?」

亮「まあ、それなりに」

魔「じゃあ異変解決がたまに恐ろしい事になるってことか?」とを...教

えてやるやーーー！」

亮「ちよーー? 何すんだよーーーまたかー一人ともーーー

魔「その通りだぜーーー邪魔すんなよーーー！」

ア「うめんなさい。 亮太」

亮「じゃあ俺は異変解決するまでーーー！」

亮「いっつ……手加減つてもの知らねえのかーーー！」

魔「私の辞書には無いんだぜ」

亮「もうリターナーになるかも知れないな

魔「はっはーーーまた何時でも相手になるやーーー！」

亮「もうしねえよーーー！」

ア「はあ…」

レミリア&amp;咲夜

亮「明らかに怪しい人物発見！！」

レ「何よいきなり」

咲「あれは亮太じゃないですか?」

レ「本当?」

亮「おいつす二人とも！！」

レ「ご挨拶ね。怪しい人物呼ばわりなんて」

亮「だってこの異変は絶対にアンタ達のせいだろーー！」

「違うわよ……それにそんなことしたつて此方には何の利益も無いのよ……」

亮「知るか！…若さゆえの過ちつてか！…」

レ「何が若さゆえの過ちよ…？」

亮「煩い！…早く夜明けさせろ…！」

咲「夜明け？」

亮「夜明けが来ないんだよ！…だから可能性がある一人に近寄つた  
んだ！」

レ「……」

咲「お嬢様…多分亮太は…お嬢様？」

レ「毎回毎回ガキ扱いしやがつて……だつたら異変なんて関係無い  
…私はアンタにハツキリと決着をつける……ガキじや無いってこ  
と証明してやる…！」

咲「お嬢様…」

亮「ああ。 そりですか！！なら黙らせてやるよーー。ガキんちよーー。」

亮「いつてー……やつぱり強いなー」

レ「よつやくわかったか……私の強さが……」

亮「咲夜つて」

レ「なんだとーーー亮太ーーー」

亮「いやーホント」

レ「負け惜しみするなーーーおい待てーーー」

咲「行つてしまつましたね」

レ「ムカつくーーー」

幽々子&amp;妖夢

亮「お。夜更かし一人はつけーん！！」

幽「あら」

妖「義兄さん…？」

亮「え？ 異変解決…だけど」

幽「あら？ それなら心配いらないわよ」

亮「でも夜明けが来ないから…誰かが時間止めてるんじゃないかなって…」

妖「幽々子様…」

幽「ええ。私達のことね…」

亮「なあ二人とも…！…何すんだー！？」

幽「ゴメンね亮太。邪魔される訳にはいかないのよ」

亮「やつぱりアンタ達だったのか…」

妖「行きます…！」

亮「くつ…なんだかやりにくいな。仕方ない。これは俺の仕事なんだ…！さつさとやられろよ…！」

亮「うわっ…？…一人がかりなんて勝てるわけないだろ…！」

妖「負け惜しみですよ」

亮「もう…早く行ってくれ」

幽「なら遠慮なく」

妖「ごめんなさい義兄さん」

亮「強くなつたな…」

妖「？」

亮「何でもねえよ…早く行け」  
いろいろな事があつた

色々な異変にも俺は首を突っ込んだ

その代わり分かつたこと気づいたことがあり出逢いがあつた

常識に囚われない世界

そして皆がいる世界

大切なモノがある世界

だれ一人欠けてはならない種族は違えども俺達はこの世界の住民なんだから

俺達は家族だから

俺はこの世界が大好きです

だから守る。みんなの笑顔の為に

だからどんな異変が起ころうとも俺は動じない

さあかかるてこい… どんな火の粉も振り払つてやる…！

## 第四章（前書き）

妖夢視点です

## 第四章

「こんにちは。

白玉楼の庭師兼幽々子様の剣術指南役の魂魄妖夢です！！！  
文字にすると結構長いですね。

今日は外の世界で言うバレンタインだそうです。

私も仕事が一段落したらチヨコを作ろうと思っています。

紫様が言い出したこの企画…好きな人に渡したり友達と交換したり  
するんですね

なら、私もある人と幽々子様に渡してみようと思います。

ある人については秘密です。

そして私は今義兄さんと一緒に庭の掃除やっています。  
私は

「他のことしなくていいのですか？」

と聞きました。

何故なら、バレンタインでの男性はすぐに浮かれていたの  
で。  
すると義兄さんは

「お前らの傍にいる母が忙しい

と言った。  
ちょっとむりとした…  
だから私は

「もうですか…」

とちょっと怒り気味に言った。  
すると義兄さんは少し狼狽えて

「…、コメント…ウソウソ…嘘だつて…ホントはお前らと一緒に  
いるのが好きただけだ」

と言つてくれた。

いつかお前らじやなくてお前に変わつてしまつて…  
そして私は

「あつがとう…義兄さん…」

それから掃除を再開した

掃除が一段落してチョコを作の為に台所に行こうとする義兄さんはまだ付いて来るの、一日縁側に居るようになりました。まだ心臓がドキドキします。

今は台所で義兄さんと幽々子様に出すお茶と御菓子を用意しています  
チョコはその後ですね

縁側に着くと義兄さんの姿は無く幽々子様だけが座っていました  
私は幽々子様に

妖「義兄さんはどうしたのですか?」

と聞いた

すると幽々子様は

幽「亮太ならお密さんが来たから会いに行ってるわよ

と言った

私はため息を吐き幽々子様の横に御菓子とお茶の乗ったお盆を置いた

幽「心配？」

妖「……はい」

幽「大丈夫よ」

妖「……はい」

何を根拠にそんな事を言つのだろうか  
確かに心配だ… 義兄さんが他の女性と一緒に…… 考えたくもない  
私はここの人達より可愛くもないし、キレイでもない。  
ましてやこの真っ直ぐ過ぎる性格だから…  
あーもう… 考えたら考えるだけ胸が苦しくなる…!  
さつやとチヨコを作ろ!…

また台所に行こうとすると幽々子様が一緒に付いてきた

幽「私もチヨコを作るのよ。私は友チヨコと並んでやッね」

と言つてきた。

幽々子様は義兄さんの事をビビり思つてこるんだね!...

取りあえず幽々子様と一緒に作つてあります。

私はいまだに形に迷つています

幽々子様は

「あの子なら何でも大丈夫だと思つわよ」

と言つていた

でも何だか足りない気がする...

こんな形で皆に勝てるのか?

いやいやいや!! 何で勝負なんかしてるんだ私は!!

その時幽々子様がこんな事を言つてきた

その瞬間顔が熱くなるのがわかつた

「や、そんな…そんなこと出来ませんよーーー。」

「あら? 満更でもないんじゃないかしら? 皆に勝つならそれくらいしないと」

「そうですかね…」

なら少し頑張つてみようかな  
取りあえずチヨコ作り

時間は夜になつてゐる

義兄さんを呼んで桜の下にいる

この桜の木は季節に関係なく咲いている桜である

因みに今の季節は秋です。私はアキザクラと呼んでいます

「綺麗な桜だな」

義兄さんが来たみたいだ

私は今の言葉に相づちを打つた

「話しつてなんだ?」

無邪気な笑顔で「コチラを見てくる義兄さんを見て少しありにくくな  
りました

でも負けたらダメ魂魄妖夢……言えるのは今しか無いの……

「義兄さん……チョコ渡しますから……後ろ向いてください……」

「わっ！？何だよ……急に大声出すなよ」

と言ひながら後ろを向いた義兄さん

それと同時に口の中からなチューリップを畳み少し溶かし

「義兄さん……」口に向ってぐだぐだ……」

「 もうここのか?どんなチューリップなん…んむつ…?…」

少し背伸びしながら義兄さんにキスをして口移しをした  
ほんの数秒がとても…とても長い時間に感じた

唇を離し義兄さんに向き直る

義兄さんの顔は真っ赤だった…私もですがそれ以上に真っ赤だと思  
います

「 も、 もも、 も前…」

「 も…ゴメンな…ん…?」

逆に仕返しを受けたみたいだ

「 義兄さん…私は…私は…」

「 待つた…!」

義兄さんに止められた……やっぱり他に好きな人がいるのかな……悔しいなあ……

「俺から言わせり」

「え？」

「俺は……お前が……好きだ……先に言わしたくなかったんだよ

「え？ それじゃあ……」

心の中のつゝかえが無くなつたようだつた  
義兄さんは……私の事を！？

「あと、これからはお前で浮べ。わかつたな」

「うん！ 亮太！ ！」

良かつた……ホントに良かつたよ……  
嬉し涙が止まらなかつた……両思つてことに嬉し涙が出てきた

「わわっ！？泣くなつて！…」

「「うぬせこーー！泣かしてくださーー！」

これが忘れもしないバレンタインだった

## 第四、五章

「ここにちは。どうもです。

俺は白玉楼に住む半人半靈の亮太とあります。

今日は外の世界で言うバレンタインらしいですね。

聞いた話では好きな人に渡したり友達と交換するんですよ?

紫からはそう聞きました

今は妖夢の傍で話をしています。

邪魔はしてないですよ

ただし少し妖夢がおかしかったような気がしたんで付いてきただけです

急に妖夢が話しかけてきました

「他のことしなくてもいいのですか?」

たぶん妖夢はバレンタインには男共は浮かれているっていう気持ち  
があるんだろう  
だから俺は意地悪氣味に

「お前らどこのまうが忙しい」

と言つた。

言い方が悪かつたみたいだ。

妖夢が怒り気味に言つてきた

「 ねつですかーーー」

つて言われた。

むう … そこまで怒るとは… 予想外だつた  
なだめるように俺は

「 ハー、ゴメンー！ ウソウソー！ 嘘だつてーーー！ ホントはお前らと一緒に  
いるのが好きなだけだ」

と言つた。

少し満足気な妖夢であつた。

ホントは「お前と一緒にいるのが好きなだけだーーー」 つて言つたか  
つたんだがな… 俺つて小心者なんだな

庭の掃除が終わつた妖夢は台所に向かつて行つた

俺は縁側に居るようになつて言われたので今は幽々子と一緒にいます。

「今日は晴れてるわね」

「確かにね。昨日まで雨続きだったからな

「暖かくなつたら眠なくなるわね～」

「そうだな

なんて他愛のない会話をしていたらカメラのシャッター音が聞こえてきた

「やつぱりあなた方2人は絵になりますね～」

「なんだ…文じゃねえか…」

「はい。少し話しませんか?」

「いいぜ」

取りあえず階段付近まで文と歩いていた

「いやー…別に話すことなんてそんなに無いんですけどね」

「何を言こ出すんだ」「イツは…

「だったら何で…? どうか何時もの喋つ方してくれ」

「そり? チョ「私に来ただけよ。はい」

キレイにラッピングしたチョ「を渡してくれた

「早く付き合こなさいよね。妖夢と」

「うぬセー。用が済んだらとっと帰れー」

「はーはー。その時は新聞一面に載せますからねーー。」

記者魂が最後に出ていたな…

戻ろうとする珍しい客が来た

「久しぶりに会こに来たわーー。」

「どうもお久しぶりです」

「また珍しい客が来たもんだ。久しぶりだな。天子に衣玖」

「そうあの二人組だ

天子が地震起こしたおかげで偶々博麗神社にいた俺が死にかけたんだよな

「俺がマジで死にかけた時以来だな」

「俺が嫌味たらしに言うと天子は

「う……アレは素直に謝ったじゃない……」

「ふふ……アレは正直以外でしたね」

「まあ正直に謝つたからアレぐらいで済んだんだから感謝しろよ?」

「何する気だつたの!?」

久しぶりにあつたものだから会話ははずみ満足したこと

「コレ渡すわ

「チョコか?」

やつぱりチョコしかないよな…

「亮太が大好きな【アノ】桃も使つてますよ」

「そ、そつか…」

アレそんなに美味しく無いんだよね。衣玖は分かって入れてるつ  
ぽいけど

「そろそろ帰るわ。また来るわね」

「ああ」

そう言って帰つて行つた。そろそろ戻ろうか。  
戻つていると後ろに気配を感じ振り返ろうとしたとき何者かに抱き

つかれた

「なんだ…バレてたのか」

そこには光学迷彩を着ていて頭だけしか見えてない河城にとりがいた

「全部脱いでくれ……生首は心臓に悪い」

「ゴメンゴメン。これで大丈夫でしょ？」

何時もの服を着たにとりが立つてゐる

「チヨコ渡しに来たんだけど……一つお願いがあるんだよ

「なんだよ？」

にとりが言つてきたのは外の世界のモノを見たいから紫に言つたら  
しいのだが保護者兼付き人が要るらしいので俺に言いに来たらしい

# 「大丈夫かな？」

「まあ…別に大丈夫だ。俺も興味があるしな」

早苗だけの情報だとまだ足りない気がするから調べたい」とはなく  
さんある

「よっしー！ 決まりー！ はいチヨコー。じゃあねー！ 楽しみにしてるよーー！」

にとりは俺にチョウを渡して風のよつに去つていつた  
誰も居なくなつた…昼に差し掛かってきたので昼飯を食いに戻るつ  
とした

「遅かつたわね」

「ん？ ああ… 久しぶりにあつたら会話はずむからな」

「はいチヨコ」

幽々子からチヨコを貰つた…仕方ない…貰つたチヨコ全部食べるか

「うひ…幽々子のだけぬい…衣玖…何の恨みがあるんだ。あれほど桃はいらんと言つたのに…にとりはにとりで何かパーティみたいなのが出てるし…」

「災難ね…」

この調子で何人か来たのだが印象があるチョコだけ教えよう

「フランのチョコなんだが…何か血生臭いんだよな…血肉とか…まさか…はは…は…」

「チルノはチルノで冷やしそぎて凍つてるし…確かに冷えてるチョコは好きだが…」

「ナズは…チーズだよな…だがそのご主人は…かつら…げほつ…げほつ…辛すぎるだろ…?…何を間違えて唐辛子を入れたんだ?ありえんだろう」

「ぬえとかてぬとかは明らかに下心ありありの唐辛子つぶりだな。もつじつかのドジつ虎のおかげでもう麻痺してるから辛くな…あ、駄目だ辛い…死ぬ…死んじゃう…」

「クスツ…大丈夫?」

悶えている俺の横でクスクス笑いながら楽しんでいる幽々子

「ふは～…まだペロリペロしているよ。…またチョコが増えてるよ。」  
直しに食べよ…」

それからチョコを食べ終わったのが夕飯前だ。

「義兄さん?」」飯ですよ～」

「いや～…今はいいや…」

「何故ですか?」

「チョコの食べ過ぎ～」

「……………そうですか。では暫くしてからあの場所に来てください」

「…分かった」

あの場所とは季節外れの桜のことだ

妖夢の見つけた桜はアキザクラと名付けられた

暫くして妖夢のもとに行つた

「綺麗な桜だな」

と言つと妖夢は

「そうですね」

と相づちを打つてきた。

妖夢の顔が心なしか暗かつたような気がした

「話つてなんだ？」

だから少し元気付けるように明るく言つた  
すると余計に暗くなつたような気がした

だがその後もじもじしていた

今日の妖夢の様子がおかしそぎる

「義兄さん… チョコ渡しますから… 後ろ向いてください…。」

「わっ！？ 何だよ… 急に大声出すなよ」

後ろを向かされた俺は少し不機嫌になつた  
少し時間が経つてから妖夢が

「義兄さん… こいつに向いてください…。」

と言つてきたので振り向こうとした

「もういいのか？ どんなチョコなん… んむつー…。」

最初は何か分からなかつた…

時間が経つてやつと気づいた

キスされたんだと… しかもチョコは口移しで渡してきた

今までのチョコよりも幾分も甘い気がした

息が続かなくなつたのか妖夢が離れていった

顔を真っ赤にして出ている舌からは銀色の糸が俺の舌と繋がっていた

満足そうな顔をしている妖夢に少しづつとしたのでやり返すこととした

「『J...ゴメンな...ん！？』

今度はさつきよりも早く離れた  
すると妖夢は

「義兄さん...私は...私は...！」

「これは駄目だ！！先に言わす訳には...！」

「待つた！！」

俺は静止をかけた。妖夢はやつぱり...みたいな顔をしていた。

「俺から言わせろ」

この一言で妖夢の顔が変わり驚いた表情を見せた後悲しそうな表情  
を見せた。

「え？」

妖夢から言つてくれようとしたんだ……だけど……俺が許さない

「俺は……お前が……好きだ……先に言わしたくなかったんだよ」

「え？ それじゃあ……」

「あと、これからは名前で呼べ。わかつたな」

「うん！ 亮太……！」

あら？ 少しは躊躇するかと思つたのだが  
と思つていたら妖夢が泣き出した

「わわわ……泣くなつて……！」

「うぬうぬ……泣かしてください……！」

と言つて叩いてきた

忘れられないバレンタインだった  
というのは妖夢だけだと思つ  
これからが大変だったんだ

カシャカシャ

という音が聞こえて振り返ると

「ちゅうと文ー?バしてるわよー?」

「あやややや……仕方ないですわ。散ー!」

はたてと文が居たが去っていった。  
さつきの音聞いたことが……まさか

「写真撮られたあああー?」

妖夢も泣きつかれて寝ちゃってるし……今日の夜は長くなりそうだな……

「待て!リラアアアアアアー!ー!ー!ー!」

「「来ちゃったああー?」「.」

結果は分かりきってはいたが……少しでも抵抗したかった

「うわわー?」

でも落ちてこく中…思つたんだ…

「結局バカるんじやね……？」

ひたすら…そして俺の意識は途切れたり

## 第五章

ある日、俺は何時ものように朝起きて朝食を食べ妖夢の手伝いをして休憩に幽々子と話していると

文「あやや……今田はイチャイチャしてないんですね  
は「もうめんなさい文……」

文「なに言つてるんですか……」これから毎日の手伝いをやられんですか  
から……」

亮「うるせえ……バカヤロウ

幽「ふふ

そこにお茶を持ってきた妖夢

俺はお盆を受け取ろうとした時それは起しつた

ズシャア

亮「え?」

割れたお盆が宙に舞つた  
それと同時に俺の手首が飛んでいた

亮「ぐあああああーーー！」

幽「な、何をしているの妖夢ーーー？」

妖「ア…アヒヤ…アヒヤヒヤ…」

文「ま、ま下さいですよーーー本格的にま下さいですよーーー」

は「それより亮太をーーー！」

亮「うぐ…ああ…な、なに…やつて…」

ズシャ

また皮膚が切り裂かれる音がした  
肩から斜めに切り裂かれたみたいだ

亮「あ…」

ドサツ

俺は地面に倒れ込んだ

幽&amp;文&amp;は「亮太！！」

亮「だ、だいじょぶだつて…ゴフッ…あれ？目の前が霞んで…」

紫「死なさないわよ。早く永遠亭！」

亮「ゆ…かり…？」

霞む目で見えたのは紫の姿だった  
その中で赤い目をした妖夢が斬りかかっていた

紫「消えなさい」

紫が腕を振るつた瞬間妖夢が消えた

何故消えたのかは自分の意識が無くなつていたから聞けなかつた

どいだい...。

真つ暗な闇の中で俺は立っていた

「やめてください...！」

声が聞こえるが姿は見えない

「貴方達の目的はなんですか！？」

この声...

その時殴られるような音が聞こえた

「ぐつ……助けは……来ない……のかな……助けて……亮太……」

亮「妖夢！？」

それと同時に布団から目覚めた俺  
相等大きい声といきなり起き上がったからか横にいた鈴仙が飛び上  
がった

鈴「び、びっくつした… 起きたのですね。気分はどうですか？」

手首を見てみるとしつかりと治っているが違和感がまだ少しあつた  
体の刀傷は綺麗に消えていた

亮「まだ違和感がある」

鈴「少ししたら慣れてきますよ」

亮「そうか。ところで紫は居ないのか? 聞きたいことがあるんだが」

スキマから紫が現れた

紫「なにかしら?」

亮「先ずは妖夢について知りたい」

紫「アレは妖夢ではないわ。別の所へ転移させて代わりを置いたの

よ」

亮「じゃあ妖夢は…」

紫「そうね」

亮「…何故妖夢なんだ？」

紫「それはわからない。一応場所は特定しているわ」

亮「流石だな。でも何かあるんだな？」

紫「そうね。結界が張つてあるわ。壊してしまつたら空間が不安定になつて大惨事になる」

亮「じゃあどうして」

紫「結界を保護している奴等を倒し結界の四隅にある印を同時に消す」

亮「保護している奴等って」

その時弾幕が飛んできた

それを全て刀で防ぐ

亮「鈴…仙…？」

鈴「アハ…アハハハハ…！」

狂氣に満ちた笑い声が響いている

亮「…まさか…」

紫「そのまさかよ。奴等が守護者よ。幸い本人よりは能力は落ちるわ

亮「そうなのか…よし。本人じゃないなら問題なく斬れ…ヒュン…る？」

目の前の鈴仙に矢が刺さる。

俺の頬には一筋の傷ができてしまった

亮「いつた…おい永琳…危ないじゃねえか…！」

永「大丈夫よ。それくらい」

後ろには弓矢を構えた永琳が立っていた

亮「それより……何時死ねんだコイツ?」

と言いながら偽鈴仙を真つ二つに斬る

鈴「ハハハ……ハハハハハハ……！」

這いすりながら此方に近づく

その敵を倒そうとする健気な行動は俺にとつては恐ろしいだけであった

紫「主人に忠実ね」

亮「お前のとこみたいだな」

紫は少し悲しそうな顔をして

紫「最近藍が冷たいわ……」

亮「…………おい！…それよりどりつすんだ！…」

紫「粉々にしたら？」

亮「お前の力で大丈夫だろ」

紫「私が居なかつたらどうする気？」

亮「知らねえよ。居るから言つてんじやん」

永「2人とも息絶えたみたいよ」

紫「ほら亮太が話しているから…」

亮「紫だつて悪いじゃねえか」

田の前の息を引き取つた偽鈴仙の死体は砂みたいになつて消えていつた

亮「なあ。やっぱり他の奴も…」

紫「多分そうね。今調査をしてもらひてこるわ

そこに藍と文とはたてが来た

調査はこの3人に任せていたのか

藍「現状を報告します。幻想郷の小さい子を中心に拐つてこるよう  
です」

文「まあ…正確に言つて…幼女や少女のかわいらしき子達を拐つて  
いり…とこり」とよ

文が真剣な顔をしている  
文もあんな顔ができるのか…

は「その子達はもういない。代わりにあの守護者が置かれているわ

亮「女の子中心って訳か…本当に小さい子が好きみたいだな。口リ  
コンだな」

文「人のこと言えないでしょ…」

亮「なつ……俺はただ子供好きなだけだ……」

文「はいはい

紫「そんなことまだいいでもいいわ。これからどうするの？」

亮「一つ一つ探すしかないだろ。手分けして倒して行くか？」

紫「そうね……」

「つして俺達は何人かに分かれて行動することになったんだが

文「さあ、行きましょ

亮「寄りによつてお前かい……」

くち引きのけつかなんだけどな

文「まあまあ。さあ、行くわよ

亮「はあ……ところで今は誰彼構わず女の子が拐かされているんだな」

文「そうね。紫の創つた結界の中に入っている人達には何の問題もないわ」

亮「で…取りあえず人里に向かつてんだな?」

文「そうよ

俺達のいる道の少し向こいつ側に靈夢さんがいた

亮「流石博麗の巫女だな。異変解決の為に動いてんだな」

靈夢さんに向かつて走つている俺

文「亮太!!下がりなさい!!」

亮「え?」

いきなり靈夢さんが振り向く

靈「クフフ…クフフフフフ」

亮「おわー?」

「マジかよ…靈夢さんまでもが…

文「亮太ーー行くわよーー」

亮「仕方ないな…わかった!」

いくら本人より能力は劣るといつてもやはり強い

亮「夢想封印ーー?」

文「そんなものまでーー!」

夢想封印を避けつつなんとか近づく

亮「沈め……」

ずっと前に紫から貰つた刀を取り出す  
長さ、重さ、形と言つたものが無く自分の思った通りに変えること  
ができる

なんというズルい剣なんだ……

亮「剣技『安息への導き』……」

軽い剣に変えて倍以上の速さで相手に近づき相手の首をとぼす

靈「クフフフフ……クフ……フ……」

息絶えたみたいだ

砂みたいになつて風に流れた

亮「終わつた……」

文「巫女が拐わるとわね」

亮「転送装置が在つたとすれば多分賽銭箱に付いていたんだろうな

……

文「まあ…今は先を急ぎませじょ！」

亮「ああ

人里近くまで来た……と思う  
何故思うかって?  
だって人里が無くなっているから…  
そこに1つの人影があった…慧音だ

亮「慧音…！」

慧「…！」

亮「無事だつたか！…！」

慧「亮太？本物の亮太なのか？」

亮「何言つて…つてーつおつー…？」

慧音が体当たりしてきて俺が押し倒された感じになってしまった

文「あー。浮氣しますね～」

文がカメラを構えて撮してきた

亮「やめ……撮るなって！」

慧「亮太ー！」

亮「や、やめ……頭押し付けるなー！いた、痛い！……離れろ！……」

慧音を引き剥がして慧音と向き合つた

慧「やつぱり本物は違うんだな。ずっと偽者と戦つてたから……もう私以外居ないんじゃないかって思つてた」

亮「……そつか……ところで村が消えてるんだが

慧「ああ。私が消しているんだ。今は危険だからな」

亮「そうか。それならいいんだ。慧音も一緒に来ないか？一人よりは楽だと思うぞ」

慧音は頷いて肯定の意を表した

亮「よし。紅魔館に行くぞ。彼処の姉妹が心配だ……」

文「ロリコン……」

亮「お前…殺すぞ…？」

文「ゴメンナサイ」

取りあえず俺達は紅魔館の入口に来ていた  
相変わらず美鈴は寝てる  
だから勝手に入らせて貰った

玄関に入った時、目の前に突如咲夜が現れた

咲「あら？珍しい面子ね…お嬢様に御用かしら？」

亮「ああ」

今の様子からレミィはまだ捕まっていないみたいだ  
咲夜に何時もの所に行かされた

慧「今の状況は危険なのか?」

亮「なーに。結界破つたら速攻だ。そんなにヤバくねーよ」

慧「そうか…」

そこにレミィが現れた

欠伸をしながら来たので寝起きというのがすぐにわかつた

レ「ふわあ～……うーん…何よ…?」

亮「ああ。ちょっとな」

何故レミィは拐われていない…?  
見張りが厳しいからか?  
いや、やっぱり転送装置があるんだ

レ「突然なによ?貴方が私に用なんて珍しいわね」

レミィが椅子に座ろうとしていた

まさか……レミィが座る椅子にあるのか!?

亮「座るなレミィーー。」

レ「え? きやつー?」

俺は叫んでも座る様子を見せたので間一髪のところでレミィを抱き抱え別の方向に飛んだ

文「よし…バツチリーー。」

亮「また撮つたな!?」

レ「それより早く離しなさいよーー。」

亮「ああ。すまない。咲夜。レミィと同じ様な人形持っていないか?  
?」

レ「そんなもの有るわけ」「これで良いかしら?」なー?」

咲夜から貰つた人形を椅子に座らしてみるとバチッと音をたてて人形が消えて何かに入れ替わっていた

亮「來たぞーー!」

「アハ…アハハハ!! アッハツハツハツハツハ!!」

レ「な、何よコイツー?」

亮「事情は後でだーー先ずはコイツを倒すぞーー!」

現れたのは偽者のレミイだ。

これでわかつた事は、転送装置が有るつて事だな

亮「レミイーー!」

レ「つーー私と同じ槍ー?」

「アッハッハッハッハッハー！シネー！シネエエエーーー！」

レ「そんなものー」

レミイの放った槍と偽者のレミイが放った槍が激突する。偽者の力は劣るからレミイの槍が勝つと思っていたが

「うそ……そんな……」

咲「まさか…圧されている!？」

その瞬間、レミイに向かつて偽者の槍が飛んでいく間に合わない！！

亮「レミイイイイイイ！」

バチバチッ！

見てみるとレニアは無傷で田の前にフランが立っていた

フ「大丈夫？お姉様？」

レ「フランー？」

亮「フランー話しが後だ！！先ずは「偽者を倒すんだね？」……察しがいいじゃねえか」

フ「消えて……」

グシャア…

フランのおかげで被害無く倒せた  
レミィはこちらへ向いて

レ「何だったのよ……アイツは……？」

亮「い、今異変が起つてんだよ。今から説明するから……」

俺は今までの経緯を全て話した  
レミィは本当に驚いた様子を見せた

咲「貴方はこれからどうするの？」

亮「俺は……た、助けてくれ……」は?

パ「ま、待ちなさい……逃げても何も変わらないわよ……」

パチュリーと魔理沙が走ってきた。

魔「ちよ、ちよ、うひうひ……手伝ってくれ……」

「ウフフフフフフ……アハハハ!!

亮「今度はフランかよ……」

慧「そんなこと言つている暇は無いみたいだぞ……」

文「来るー。」

亮「やつべ…相当キツニヤ

長時間に渡る死闘は暫こいつてもキツかった

フ「私と…回じへせこここ…！」

亮「フランー？」

フランが偽者に近づき頭を掴む

フ「吹き飛べ…！」

亮「止めろー…！」

「ウフフ…一緒にキエルノ?じゃあ…一緒に…」

偽者もフランを掴む。

ヤバい…ヤバい…

動けよ体…

亮「くつわおおおお…」

レ「泣えるのはお前だ。それが運命だ」

「な…」

偽者の手がフランから離れる  
その後ろにステレミイがいた

フ「お姉様…」

レミイがフランを抱きしめた

レ「無茶しないで…」

何か近づけない雰囲気だったので偽者の近くまで来ていた

「私…負けたの…~もつ…戻れないの?」

亮「おい。何でお前は消えないんだ？」

「うう……ぐすり……うう……イヤ……だよ……死にたくないよ……ぐすり」

何だ何だ？

様子がおかしかぎるぞ  
コイツはなんなんだ？

「助けて……お父さん……お母さん……亮太お兄ちゃん……」

亮「お、おい」

「あれ？ 何だか目がボヤけて……幻聴かな？ 亮太お兄ちゃんの声が……」

亮「おい……逝くな……どうされば……」

「せよなり……み……んな……」

彼女は生き絶えてしまった……

慧「亮太」

亮「ああ、慧音か…。たつた今分かつた事がある」

慧「分かつた事?」

亮「偽者の中には……いや……原型は連れ去られた女の子達で構成されている」

慧「何!?」

亮「最後だけ声が戻っていたが……知っている声だった」

慧「そうか……文」

文「どうしたの?」

慧音は文に説明をしていたので俺は咲夜のもとに向かつた

亮「咲夜…」

魔「よつ……」

亮「……魔理沙……いたのか？」

魔「酷いぜ……最初からいたぜ……それより教えてくれだぜ……何なんだぜ……？アイシラ……！」

亮「わかつた……わかつたから落ち着いてくれ」

これまでの経緯を全て話した

魔「そつか……」

咲「……」

亮「どうした？」

咲「いえ。何でもないわ……それより安全な場所はあるのかしら？」

亮「あることはあるが……お前達が固まつても不安か？」

咲「不安ね。万が一といふこともあるしね」

亮「ふーん… 1つ思つたんだが… 何故レミィを助けなかつた。お前の能力なら余裕の筈だ」

咲「そ、それは… 大丈夫だと確信出来たからよ」

何故だ？さつきから咲夜の様子が変だ

亮「そうか… ジャあ咲夜。アレ持つてきてよ。疲れたから」

咲「ア、アレ？… わ、わかつたわ。任せて」

取り合えず待つとしようか…

一瞬で姿を消したが…

咲「持つてきたわ」

亮「來たか… ありがと… よーーー」

俺は咲夜を殴り飛ばした。レミィが驚き「あらに来る

レ「な、何をしているのー? 何故咲夜をー?」

魔「わかつたぜ。亮太」

魔理沙が八卦炉を咲夜に向ける

俺は刀を構えて魔理沙に向かって頷いた

咲「な、何故!?」

亮「ほらほら。早く起きろよ偽者ー」

その場にいた全員が戦闘体制をとった

俺はフランを呼んだ

フ「どうしたの?」

亮「ちょっと待つてみ」

咲「な、何故バレた!/? 完璧だった筈だー!」

亮「残念…お前の行動で全てわかつた。俺はアレなんて頼まない。そしてレミィを助けなかつた咲夜はおかしそぎる。誰かがやるだろうみたいな考えではない。もういいな。じゃあ…ソチラ側の情報を

「ひいー?」貰づぜ。フラン!右足だ!—!

「ぐわあああー?」

逃げようとした咲夜の形をした何者かの右足を砕く

グキヤという嫌な音が響いた

転けた相手の首根っこを掘み刀を向ける

亮「ああ。吐いてもらひつか?吐かなきゃ…殺るよ…」

「ひいー…や、止めろー…」

亮「言うのかー?言わないのかー?ほきつしりー!—

腹に少しだけ刀を刺す

相手は苦痛の表情をしていく

亮「アハハ!! 良いね!! その表情!! 言わないんだろう!! 言えないんだろう!! アッハッハッハ!!」

魔「り、亮太？」

亮「もつと喚け……もつと叫べ……」

さりとて深く刺す

「ぐああああ……」

もつと深く刺していく  
その時手を止められた  
掴まれたというよりは抱きつかれた感じだった

フ「止めて」

亮「邪魔するのか?」コイツは皆を「ここから……」

剣を引き抜く

亮「わあ言え……お前らの親王は誰だ……目的は……」

「す……す……す……みませ……ん……」

亮「おいおい……待てよ……」

フ「止めてよ……そんな亮太…見たくないよ……」

亮「……」メン……これからは一人で生存者を探す……後のことは頼んだ」

「うして階と別れた俺は一人で次の場所へ向かった

幽「で？逃げて来たってわけ？」

亮「うるせえ幽香……ってか何で付いてくるんだ？」

そう、次に行こうとしている途中で幽香に出会ったんだ

幽「面白そうだからよ。それにこの子も連れていかうからね」

日傘を持っていない手でメティスンを出してきた

亮「これはまた懐かしいな…久しぶりだなメティ」

メ「う、うん。久しぶり…」

亮「取り合えず妖怪の山を田指すけど…ついてくるのか?」

幽「ええ。面白そだから」

メ「私も。2人と一緒の方が安心するから…ついていつてもいい…かな?」

亮「ああ。大丈夫だ。俺も2人がいてくれて方が頼もしいよ」

メ「あ…う、うん!」

少し照れくさそうな表情をしたその横で幽香が

幽「はあ…仲間が必要なら戻つたらいいのに…」

と言われた

亮「ははは…」

あんな姿を見せて一緒に居られるわけ無いだろ

幽香には一度見せた事があるからな…

つてことで妖怪の山に着いた

亮「静葉」

静「！だ、誰！？」

なんだ？この驚き方…なにかあったのか？

静「ほ、本物だよね…？」

幽「何かあつたの？」

静「天狗達がみんな狂い出して暴れているんですよ…」

亮「…やはり…」つちもか！？」

幽「でもおかしいわ。天狗を狙うなんて」

亮「確かに…そういうや…穢子はどうした？」

静「それが…途中ではぐれてしまつて…」

亮「まじか？だつたら探ししながら行こつ」

歩いていると天狗達が群がつていてるのが見えた

亮「くつ…なんかあるよな絶対」

幽「そうね。蹴散らすわよ…！」

亮「…………ちつ…仕方ない…のか…」

メ「動きが鈍くなつたよ…！」

亮「ナイス！–敵への慈悲を…苦しむことはない…」

数人を斬るがそれらは砂になり散つていった

亮「なんだ？何か違う」

幽「何ぼーっとしてゐるのー?」

残りを幽香が倒した

その天狗も直ぐに消えていった

亮「違ひ…血が出でいない…」

フランとは違ひて言語も理解していなかつた  
なら…空っぽの偽者もいるのか!  
なら殺さなくともいいんだよな…

幽「亮太…!…聞いているの…?」

亮「うわっ…!…す、すまん…!」

幽「まつたく…敵もいるんだからしつかりしなさい…」

亮「あ、ああ。でも…奴らの中にも人間が混じつてゐるんだ…俺は…  
本当に斬れるのかな…つて…」

幽「知らないわよそんなこと。あなたが斬れないのなら私が殺るわ」

亮「だが奴ら「だが何！？」…」

幽「もういいわ……友人や知人を殺めなればならない時もあるのよ…」

亮「……」

暫く歩いていると

？「はあ！！」

上空から誰かが剣を振り降ろしてきた

亮「うおつーつならあつー！」

剣を受け止め弾き返す

相手は吹き飛んだが体制を立て直しました向かってくるまた剣を横に振ってきた

それを受け流し斬りかかるそしたら粗手も受け止めっぱぜり合ひが  
始まつた

亮「誰かと思えば…子犬さんじゃねえか…！」

柾「誰が子犬ですか…！」

また離れて詰め寄る

何度も剣を合わせたあとっぽぜり合ひに戻つた

柾「文様は最近貴方の周りにいていつとも帰つてきません…」

亮「俺に言われても困るな…」

柾「だからそろそろ文様を返してくれませんか？」

亮「悪いけどそれは俺じゃなくて本人に交渉してくれや…！」

柾「文様は私の言つ」とを聞いてくれません…だから…！」

亮「だからって…うわっ…？」

俺達の周りの地面が抉れているのがわかつた  
柵は後ろに引いていた

幽「…私はなにもしてないわよ」

亮「違うの？じゃあ…」

文「……」

亮「なんだなんだ？噂をすれば影が射すつてか！！」

柵「文様！！」

亮「？」

文「ハアツー！」

上空から猛スピードで急降下しながら蹴りをいれてきた

亮「速つ！？守る力よ！！」

剣を突き刺した回りに魔方陣が描かれ皆をまるく囲んだ

文「チイ！」

亮「何すんだよーー！」

文「まダワ力らないの？」

亮「なー!?」

「やつトわかつタンダ… ジヤア死ね」

一気に田の前に詰め寄られ蹴り飛ばされた

亮「やつ…！」

やうに風の力で鎌鼬のように切り裂いてきた

幽「甘いわーー！」

幽香は防いだみたいだ

メ「きや！！」

桜「危ない！！」

メディスンは桜が守つたみたいだな  
だが俺はもうにくらつちました…しばらく動けないかな

「あんたからダ！！亮太！！」

亮「ふつ…殺つてみるよ…」

そのときに文の偽者は周りに風を吹き正面以外からの攻撃はさせないよつにした

幽「これほどの力が！？」

メ「動けない！！」

桜「亮太さん！！」

亮「何が…文の偽者だ…所詮偽者じゃねえか」

? 「その偽者にやられてるのは何処の誰かねえ……」

亮「お、お前

? 「そりやーー！」

偽者を切り飛ばした

「な、ナゼー？ナゼ貴様がーー！」

? 「別にいいじゃないか…そんなこと」

その人は武器を肩に担いでダルそうな感じで返事を返した

亮「バックリしたぜ…まさか助けに来てくれるなんてな…小町

小「いやー…ホント偶然つてのは怖いね~

「テキがヒトリ増えたダケダーー！」

幽「何処をみている?」

幽香が後ろに回り込んでいた

「あ……」

亮「そつちばかり気にしててもいいの……か!……」

文「グアツ……!」

俺は相手を殴り飛ばした

幽「止めだ!……!」

幽香が止めを射そつとしていたのを止める

幽「何をする気だ!……?」

亮「わかつてんのか!……? アイツは人げ……」

その時俺の田の前に偽者の首が飛んできた

亮「あ…ああ…小町いい…！」

小「済まない亮太…何が言いたいのかも知ってる。お前は絶対に止めをさせないとと思ったから」

亮「つ…」

団星だつた

俺は生かして死にかしてあの子達を助けよつとしてたん

どうにかして?

どうにかしてつてなんだ?助けても…意味がないじゃないか…!

文「お兄ちゃん…亮太お兄ちゃん」

俺ははつとして偽者顔を見る

亮「…」

「笛を…助けてね…」

亮「ああ…必ず…ゴメン…ゴメン…」

「ふふ…バイバイ…お兄ちゃん」

彼女は砂となつて消えていった

亮「行け」

メ「亮太…大丈夫?」

亮「ああ。 ありがとうメ、ティイ」

メ「そ、う…」

？「うう……やめてって……痛い痛い……」

亮「無事で何よりだ

？「だからって引張ることないでしょ……」

亮「だつてにとつ呼び掛けに応じなかつたじやん

に「だ、だからって……」

柾「良かつたです。にとつ

に「ん？あ、柾。無事でよかつたよ。文は？」

柾「……」

亮「アイツは捕まつたみたいだな。さつきわかつた……」

に「そつか……」

亮「とりあえず……神社に来たんだが」

幽「人気が無いわね……」

静「あ、あれ！－！見てください！－！」

静葉が指を指した方向には地に伏せて いる早苗の姿だった

亮「早苗－！」

早苗を抱き上げ起こす

早「ん……ん……あれ？ 亮太さん？」

亮「よかつた……早苗何があつたか話せるか？」

早「はい。天狗の事は「ああ。聞いて いる」わかりました。こちらにも襲撃がありました。所詮は天狗。私達にとつては敵ではあります

せんでした……だけど……倒した天狗から光が吹き出しあきました……それが他の天狗にも……それで」

亮「光に囮まれて……」

穢「これ……つてこと?」

早苗はゆっくり頷いた

早「す、すみません……2人を見てきてくれませんか?」

亮「すまないが……2人はもう……」

早「そう……ですか……私が力不足なばかりに……」

早苗が泣いているのがわかつた  
やつぱ女の泣いている姿つてなんか慰めたくはなるけど傷つけてしまつかもつて思うと苦手かな

は「亮太!!」

亮「はたてー? どうしてー?」

は「大変なんだ!! 紅魔館の皆が... 消えてしまつたわ...」

亮「なんだとー?」

は「紅魔館から連絡貰つてたけど急に途絶えたの... 見に行つたら

亮「誰もいなかつた」

はたてが領いて天子の所はもう確保できているから地底に行つてくれと言つた

またも1人で来た俺かと思ひきや

に「しゃつぱーつー!」

亮「はあ... 緊張感のないやつ...」

に「でも1人が2人くらいは明るい人がいるでしょー!」

亮「そんなもんか？」

に「そんなもんだよ！……亮太は無理しそぎるから、誰かが側にいないと……」

亮「なんか言つたか？」

に「何にも」

亮「そうか。入口に着いたが……大騒ぎだな」

？」

# 亮「キスメ？」

「！」

亮「何となくわかつた……一緒に行くぞーー！」

キ「…………？」

に「ま、待つてよーーーー！」

天狗が邪魔をしてくるが蹴散らして下に進む  
ヤマメの姿が見当たらなかつたのでヤマメが淋しそうな顔をした

亮「あ！勇義！！」

勇「よつ……手伝ってくれないか！？」「

勇義の周りにはたくさんの中間がいた

亮「せいや……ついてきてくれにとつ……」

に「りょうかい……」

俺が剣を突き立てる

剣から魔方陣が描かれて全員を囲む

そこから水の龍を出し全てを包み込むように天狗を巻き込んだ

亮&a m o...に「守護水龍...」

その時には天狗は消えていた

亮「流石だな」

に「いい仕事するでしょ?」

亮「当然だ。しなければ帰つてもいいんだ」

に「おお怖い」

勇「ながいいな。それより早く行くぞーー!」

亮「おうーーーー」

幸い敵は勇義が食い止めていただけの数だったので奥は安全だった

亮「やとつ...無事だつたんだな」

亮「うう……亮太さん……」

亮「他の奴らは？嫉妬姫はいるから他のだ」

パ「名前で呼びなさいよーー！」

亮「スマン……パルパル」

怒っているパルパルをなだめていたら  
燐と空が抱きついてきた

燐「お久し振りーー！」

空「たまには遊びに来てよねーー！」

亮「ゴメンゴメン……」

亮「わとつー！こっせびひました？」

さ「それが…」

？「そりやーーー！」

亮「うおわーーー？」

「こしが後ろから抱きついてきた

こ「えつへつへーーーだつてたまにしか来ないから久々だもんーーー！」

亮「はあ…あ…皆無事で良かつた。だから後は帰るだけだな。燐と  
空以外はなーーー！」

剣を2つ抜いて燐と空の頭を貫く

さ「なーー？（やはり彼の心が読めないーーなんでーーどうしてーー？  
これでは彼の行動も読めない）」

燐「なぜ？」

空「ワタシ達の正体ガ

亮「お前らにはわからないだろ? つな...」

「さすがお兄ちゃん... 頑張つてね」

彼女達は砂となつて消えていった

亮「帰るぞ」

紫「おかえりなさい」

亮「ただいま」

燐「大変だよ!... 大変なんだよ!...」

？「おかえりなさい。」じゅらも大変でした…」

亮「聖…」

聖「彼女達なら大丈夫だと思つています。ですけど…」

星「大丈夫ですよ」

亮「よひー…ドジッ虎…よくもチョコに辛いもの入れてくれたな  
一

星「い、いや…アレはわざとじゃないよ…」

亮「わかつてゐるよ…紫…準備は？」

紫「出来てゐるわ。じゃあ行きましょっか

俺達は結界の前まで來ていた

紫「では四手にわかれて合図でこの術式を使って」

亮「ああ、わかった」

何人かに別れた

亮「合図だ！！」

術式を展開して結界にぶつける  
すると、結界が割れた  
みんなは中心に集まつた  
目の前には門みたいな入口が広がっている

紫「ここからは何が起こるかわからない…だから各自警戒を怠らないで」

そして、入口へと入った  
そこは中庭みたいだつた  
次の瞬間警報がなりだしたと同時に数えきれない程の天狗が現れた

紫「亮太！！貴方だけでもあの施設に入つて！！」

亮「わかつたーー！」

全速力で走る俺のカバーをしてくれている旨  
そのおかげで施設に入る事が出来た

先ずは天狗を量産している場所を探さなくてはーー！

「侵入者発見、目標を駆逐する」

亮「邪魔なんだよ！」

亮「はあ……はあ……ふー……何とか見つけたか……」

その部屋は意外にも警備はいなかつた

亮「正解……だよ……な？……にしても機械だけしかないなんてなーー！」

俺は頭上からの殺氣に気がついて横に飛んだ  
俺がいた所は跡形もなく消えていた

亮「なんだよ……やつぱ屋のんじゃねえかよ……邪魔すんなつて……あ、  
アンタは！？」

そこに立っていたのは行方を眩ました師匠……魂魄妖忌だった

亮「な、何でこんな所に……！」

妖忌「……」

無言で刀を構えてきた

亮「何がしたいんだよ……アンタは！？」

剣を構えて向き合つ

先手をとる！

亮「はあ……」

妖忌「……ふんっ！…」

近づく」とすら出来ず吹き飛ばされ壁にぶつけられる

亮「あがつ！… げほつ！… げほつ！…」

妖忌「……弱い…」

亮「…くそつ… 何やつてんだよ… 今まで何してたんだよ師匠…！」

妖忌「答える必要はない…」

亮「現世斬！…」

妖忌「ワシが使っていた技をそのまま使っているのが愚か者…！」

いつも簡単に受け止められる

亮「チイツ！… アンタは… 何で…！」

妖忌「… ゆ… せ… 亮太…」

亮「え？」

妖忌「ぬんーーー」

横薙ぎをしてくるが間一髪で避ける

亮「あぶねーーーっておわつーーー」

師匠の腕が触れた瞬間圧迫感を感じた

妖忌「まだやるのかーーー？」

亮「つ……まだーーーアンタに聞かなきやならない事がたくさんあるんだーーー」

妖忌「ならば…ワシを倒してみせーーー」

亮「呼吸を…あわせぬ…総てにあわせぬ…」

妖忌「……ふんつーーー」

またも横薙ぎをしてきた師匠  
だがその手には剣を持っていなかつた

気づいた時にはもう遅かつた  
剣は、上に投げられていて横薙ぎの右手はフェイント…残りの左手  
剣を降り下ろしたらしい

亮「いづつ…ふう…」

今だ！！

さつき仕掛けた半靈を使って師匠を動けなくする  
師匠を蹴り上げて半靈とともに近づき斬りつつせずには殴り飛ばす

妖忌「つ…！」

亮「チェックメイト…！」

師匠の首に剣を突き立てる静かな時間が流れている  
俺は刀を鞘に納め機械の動力を壊そうとした

妖忌「…何故…止めをささん？」

亮「あのですね……貴方は私の師匠なんですよ。それに……あの子が喜ぶ筈ですよ」

妖忌「……ワシはまた裏切るかもしれないぞ?」

亮「その時はなんとしてでも貴方を助け出します。機械ってわかんね……にとりがいたら大丈夫なんだが……まあいいや。はあ……」

手に魔力を込めて殴りとばす

すると……プスプスと音をたてて電源は落ちた

亮「よしつ……」

「ウガクナシソニコウシャー……」

亮「げえ……」

構えをとつたが俺の目の前に師匠が歩いてきた

亮「師匠?」

妖忌「ここはワシが切り開く亮太…突き進め！」

亮「師匠…ありがとうございます…死なないでくださいよ…」

師匠が敵を難<sup>ハラ</sup>しが払ってくれたおかげで越えることができた

妖忌「死ぬな…か…容易い」とよ

亮「…生きててくれてよかったです…また、助けられましたね」

俺は牢屋の場所へと走った数分後牢屋の扉を見つけた勢いよく扉を開けて中を見る

亮「お前ら無事か…？」

「…亮太…」

亮「無事のようだな…今助けてやるから下がつていろ。せこつやー。」

「」

全ての檻を斬つて外す

文「ありがとう亮太」

亮「いいさ。それより外に皆いるから助けに行つてくれーー。」

俺は皆を逃がしてから妖夢を探すがどこにもいない仕方なく牢屋の外に出ると妖夢がいた

亮「あわつーー居るなら言えよーー。」

妖「…うん」

亮「あー…えつと…」

妖「！」

妖夢が走り出したのでそれに付いていくと大きな扉の前に来ていた

妖「敵の陣地」

亮「なら行くか！！」

おもいつきり扉を蹴破り中に入った

亮「よーやく」対面だな

？「誰だい？ああ。例の侵入者達の一人だね」

亮「そうだ…アンタを殺りに来た」

？「あ？ふ？…あ？は？は？は？…君一人でかい！？」

亮「は？！…一人で十分だぜ！…って一人じゃないけどな…！」

？「ふ？…僕はすずだよ」

亮「名乗ってくれるのかよ…行く…ぜ？」

腹に痛みが走った

腹部に目をやると剣が貫かれていた  
後ろに敵がいたのか

後ろに首だけ向けると妖夢しか居なかつた  
俺は膝をついて横に倒れた：

最悪の展開を考える時間もなかつた  
何故だ？

亮「うう…ってえな…」

妖

す「よくやつたよ。妖夢ちゃん」

なんだつて？

「え？ 義兄さん？ え？ 私の剣へじりついて 義兄さんの……いやあああああ！――！」

す「どうしたんだい？前から殺したかつたんだろ？」

妖「違う！！わ、私は！！殺したくなんか！！」

どうしてなんだ?

わけわかんねえ

す「僕はなにもしてないよ。殺ったのは君自身なんだから」

亮「そう……だつたのか……そいつは済まなかつたな……」

妖夢が樓觀剣を持ちすずの前に走っていく  
だがすずの目の前で立ち止まりこちらを向いた

妖「な、何をした！？」

す「なー」。さっきのは君に意識が無かつたけど次は意識がある状態で殺さうね~?」

妖「嫌だ！！やめろ！！亮太よけてえええ！！」

動かねえよ……やつ意識も無いのによ……

亮「俺は好きな人に殺されるならまだましだと思つてゐる」

妖「バカ亮太ああああああああ！」

剣先はもう直ぐそこにあるその時入口とは反対側に位置する場所が  
消し飛び大穴から人影が現れた

？「いいや～…脆い壁だな～」

亮「魔理沙？」

魔「お、亮太！…なにこれ修羅場？」

亮「ふつ…この状況でそんなこと言えんのな」

魔「冗談冗談。ほらよ」

魔理沙が傷薬をもらつた  
一目で永琳の物だとわかつた

亮「ふえ…あめえよ」の薬…良薬じやねえのか

す「な!? 傷が一瞬で! ?」

驚いているすずを他所に師匠が入口を斬つて入つてきた

亮「うえ…」

妖忌「大丈夫か?」

亮「な、なんとか。くそつ…! 妖夢…」うめむ…

妖「体が動かないよ…」

亮「しかたねえ…! 魔理沙…隙を作つてくれ…」

魔「まかせろだぜ…!」

マスタースパークを放つた魔理沙

すずが下がつた所を空かさず一太刀入れた

妖忌「亮太！！」

亮「師匠！」

妖忌&amp;亮「一連・風神！！」

師匠が近くに来て一緒に斬激をクロスになるよう飛ばす

す「ぐうつー？貴様らああああああああー！」

すずなんかバカでかい剣を出してきた約一メートルちょいぐらいかな

亮「ありがとう」入ともーここからは俺がやる

魔「おいおい…水くさいぞ亮太」

妖忌「すまんが。ここはアイツに任せてやつてはくれぬか？」

魔「へ？」「いやまあ良つけど…」

す「いぐれねえーー！」

亮「こい！！」

すずが先手をきつてきただそれを受け流し鞘で殴る

亮「お前の目的はなんだー!? 言つてみろー。」

す「僕は！！ただ女の子と」

亮「じゃあなんでその女の子を使って俺達と戦わせた！？死なないとでも思っていたのか！！」

す「違うー！そんなつもりじゃーー！」

亮「そんなつもつじやなんて通用するわけねえだろ？」「がー！」

頭突きをしてすずを怯ます

「アーヴィング！」

亮「お前は何者なんだ…どうして彼女達を自分のモノにしようとしたんだ」

す「僕はただ同じ体格の友達が欲しかつただけだ」

亮「バカか！？そんなんで友達ができるわけねえだろうが…」

す「うるさい…お前に僕の気持ちが

亮「わかるわけねえだろ！！もついい…友達の命を軽く投げ捨てる奴に友達を名乗る資格なんてない。お前のせいで俺の友達が傷ついた…お前を生かしてはおけない」

す「いい、いいよ。や、やつてやるよ…！…本来の目的を達成するまで…お前達…！」

すずの後ろにいた天狗達がすずの前に集まってきた

亮「…下衆が

す「どうだい！？手も足も出ないだろ…！」

すずの元に歩いていくと天狗達が身構えた

亮「『コメン』よ…苦しかつただろ?」

天狗の頭を撫でてやるとその無表情の顔に涙が流れていた

「お兄ちやん…」

す「なー?」

周りの天狗達も涙を流してその場に倒れた

す「な、何をしたー?お、おいお前達!ー!」

亮「安心させただけだよ。さあ殺る!つか正々堂々一騎討ちだ

俺が断命剣を構えすずの出方を待つ

す「うおおおおー!ー!」

銃みたいなモノを出して大声を上げて光線を撃つてきたがそれを避ける

連射してきたので紙一重で交わしながら近づいていく

す「何故だ！？何故当たらん！！」

亮「実力の差だよ！！」

刀を横に振り抜く

すずは剣で受け止めたが吹き飛んだ

す「ちいっ！…へりえ！…」

宙返りながらまた銃を構えた

飛んできた光線を避けることなく剣先だけで受け流した

す「う、嘘だ！…」

亮「もう…終わりか？」

す「クソがあああああ……」

剣を振つてぐるすずだが太刀筋が荒く簡単によけれる

亮「隙あつ」

蹴りで相手を怯まして顔面を殴つて吹き飛ばして壁に激突させた

す「くそつ……」

妖「きやあー?」

亮「……妖夢……」

妖夢を盾にして俺を見てぐるすず

す「どうした……かかってこない……その代わりどうなるかわかつてるよね……」

亮「くつ……」

なんて古典的な人質の取り方なんだ…  
だが攻撃するわけにも行くまい

す「ほらほら…！」

亮「ぐあつ…！」

す「すが調子に乗っているみたいだな

妖「亮太…！」

す「おつと逃げようとしたつて無駄だ」

妖「くつ…！亮太…！」

亮「うるせえって大丈夫だ」

剣を取り出してに突き刺すこれは考えがあつての行動だ

す「はつ……つこ」諦めたか！――

亮「……」

す「死ねえええ――！」

すずが突っ込んできた

亮「バーカ」

刺した剣をすずの下の地面から剣先をだし足を貫き動けないよつこする

この剣は血由に色をを変えられたる紫からもじつたものだ

す「なー?ぐあつ――」

亮「うおおりやあああ――」

断命剣ですずを刺して妖夢を解放できたのを確認してそのまま壁まで走つていく

す「クソがああああああああ――！」

壁がミシミシ音を立て亀裂が入り壁が割れて外に出した

亮「土よー！」

土を操つて敵を固めて浮かす

亮「終わったな。まあ…本当に目的をしあげてもうねえか」「

す「幻想郷の乗つ取りだよ……お前が……亮太という立ち位置が羨ましかつただけだ……」

亮「お前は外から来たのか？」

す「ああ。急にね…あーあ…び」から間違つたんだろつた」「

亮「はっ！－最初っからだろ？」「

す「ただ僕は幻想郷で幸せに過ごしたかつただけだった」

亮「だがお前は道を踏み外した」

す「だけど……もし……踏み外さなかつたら……幸せに過ぐせたのかな」

亮「お前はただ間違えただけなんだ。だからって許はしない」

す「いいよ。好きにしてよ。もつ好きな幻想郷を汚したくないんだ  
よ」

亮「生まれ変わつてからまた来い」

す「うん。覚えていたらね」

断命剣を翳して生命を断つた  
痛みのないよに

少し佇んでいると後ろから抱きつかれた

亮「おつと……妖夢か」

妖「……」

亮「お帰り」

妖「ただ…いま…あの人は?」

亮「アイツは死んじゃったよ」

妖「あの人…何時も悲しそうだった…多分心では泣いていたのかも  
…」

亮「そうかもな…だが」

アイツはやつてはいけないことをした

妖「だが?」

亮「ん?…いや…なんでもねえよ

妖忌「亮太」

亮「あ、師匠。約束守つてくれましたね」

妖忌「ふつ…あれくらい容易いものだ」

亮「そうつか」

妖夢が俺が話している相手を見て驚いていた

妖「お爺様！？」

妖忌「しつかり役目は果たしているか？」

妖「は、はい」

亮「でも今回は不覚だつたな」

妖「で、ですがアレは…！…！」

亮「言い訳だよ」

妖「むつ…」

妖夢が膨れた

入り口から皆が現れた

紫「…終わったのね」

亮「ああ。 終わった」

紫「じゃ あ帰りましょうか。 あと妖忌久しぶりね」

妖忌「ああ。 世話になつたな」

亮「え？ 2人つて知り合いだつたの…？」

紫「ええ。 貴方が幽々子に拾われる前からね」

亮「ええええ！？ 知らなかつたの俺だけ！？」

紫「やつよ」

「これで異変はまた解決できた  
たまにはやつくなつしたいな…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8694t/>

---

東方 ある家系からの幻想入り

2011年10月14日19時52分発行